

僕の先生は、放課後かわいい婚約者

草薙アキ



ファンタジア文庫

2906

Contents

プロローグ..... 005

一章 先生が婚約者!?..... 010

二章 同棲生活の始まり..... 054

三章 光太郎さんと怜奈さん..... 121

四章 先生はお嫁さん..... 177

五章 白瀬家の修羅場..... 224

エピローグ..... 264

あとがき..... 277



プロローグ



「さて、まずは歯ブラシを買おうと思うのだけれど、同棲どうせと言えばやっぱりペアものよね。だから……あ、これ可愛い！ ほら、見てちょうだい！ 二つ合わさるとブラシ部分がハート形になるの！ これにしましょう！ いえ、むしろこれにするべきだわ！」

「え、先生!? マジでそれ買うんですか!？」
驚おどろく俺を気にとめることもなく、先生は青とピンクの二本入り歯ブラシを手取る。

「当然でしょう？ その方が同棲感もあるし自然しぜんなもの。それからあまり大声で、先生せんせいと呼ばないでちょうだい。誰だれが聞いているかも分からないし……って、あ、見て！ このカップも可愛いわ！ ほら、持ち手の部分が手を繋つなぐ感じになるの！」

そしてこの可愛いものに目をキラキラさせている女性の名は、桜小路さくらこうじ怜奈れいなさん。
ふわふわのロングヘアと豊満な胸元むなもとが特徴的な美女なのだが、先ほど、先生せんせいとも呼称こきょうしたように、俺の担任だんいんである。

なお、普段ふだんはさらさらのストレートヘアに細めの眼鏡をかけている上、びしっとスーツを着きこなしており、現在のゆるふわモードとは印象が一八〇度変わるので要注意だ。

ところで何故そんな先生と、ただの生徒である俺が、今まさにペアものの歯ブラシやらカップを買おうとしているのかというと、

「もう、ちゃんと聞いているの？ そんなんじゃ私の彼氏は務まらないわよ？」

ぷくう、と先生が可愛らしく頬を膨らませる。

そう、俺たちはとある事情で恋人同士になってしまった上、同棲しなければならなくなつてしまったのである。

というわけで、今日はそれに因んだ必要物資を、色々と買いに来たというわけだ。

「す、すみません。ちよつとぼーつとしてまして……」

「まったく、たるんでいる証拠よ。そういえば、この前も授業中に寝そうになっていたわよね？ 言っとくけど、私と一緒に暮らすからには、生活面もきっちり指導させてもらいますからね」

「ええっ!? マジですか!？」

「ええ、大マジよ。大体、私を誰だと思ってるの?」

「……担任の、桜小路怜奈先生です」

「よろしい。というわけで、覚悟しておきなさい」

「……はい」

がつくりと肩を落とす俺に、先生がふふつと微笑み、そんな先生の姿に、俺も思わず表情を和らげる。

先日まではただの怖い先生だと思っていたので、なんというか、こうやって少しでも仲良くなれたのは、正直嬉しく思う。

こんな風に微笑むことなんて、学校では絶対になかったからな。

最中、ふと先生が店内を見渡して言った。

「さて、雑貨類は大体揃ったわね。ほかに必要なものは……あら?」

そこで先生の目についたのは、向かいのジュエリーショップだった。

一体どうしたのかと俺が小首を傾げていると、先生がぼつりと呟くように言った。

「……ング」

「えっ?」

と。

「——べ、ペアリングも必要だと思ふの!」

「……はっ? ちょよ、ええっ!？」

ぺ、ペアリングう!!
 そ、それってあれか!?

世のカップルたちが、互いのイニシャルを刻んで身につけるとかいう例のやつか!?
 俺には一生縁がなさそうだと思っていた代物の名前が、よもやこんなところで出てこようとは思わなかった。

だが先生は本気のように、恥ずかしそうに顔を紅潮させながらも、期待したような表情で言った。

「だ、だって私たちはこ、恋人同士なのよ!! なのに指輪の一つもしないなんておかしいじゃない!?

「い、いやいやいやいや!? だからってペアリングはやりすぎでしょ!? っていうか、先生はいいんですか!? 俺とペアリングですよ!?

「べ、別に構わないわ! だって一度買ってみたかったですもの!」

「ええ……」

それでいいのか……。

いや、まあ乗り気なら全然いいんだけどさ……。

「というわけで、行くわよ! もちろんイニシャルの刻印もしてもらいましょう! あ、

デザインは私が選んでもいいわよね? どうせだし、可愛いのがいいもの!」

「ちょ、マジで行くんですか!?

「ええ! 大マジよ!」

驚く俺の腕をぐいぐい引っ張っていく先生だが、人生初のペアリングな上、相手が先生ほどの美女となると、やっぱり期待してしまうのが男の子である。

なので、口ではマジかと言いつつも、内心興奮を隠しきれない俺なのであった。



第一章 先生が婚約者!?



ともあれ、どうして俺こと白瀬光太郎が、担任の英語教師——桜小路怜奈先生と同棲することになったかという点、それは数日前へと遡る。

「——そんなに私の授業がつまらなかったのかしら？」

「えっ……？」

ふいにそんな冷たい声が目撃を打ち、俺の寝落ちしそうだった意識が現実へと引き戻される。

昨日は遅くまで新作のゲームをやっていたので、少々寝不足気味だったのだが、どうやら顔に出ていたらしい。

「やべえ……、と思いつつ、ゆっくり視線を上げてみれば、

——たゆゆんっ。

「うおっ!? でけえっ!？」

「なんだこのおっぱいは!？」

「……はっ?」

——ざろりっ。

「い、いえ、気づいたら隣にいたので、ちょっとびっくりしてしまいました……」

「あらそう。それはごめんなさいね」

というように、そこにはぱりつとしたスーツに袖を通し、その豊かな胸を強調させるかのように腕を組む女性の姿があった。

編み込んださらさらのストレートヘアと、細めの眼鏡が印象的な、担任の桜小路怜奈先生である。

確か年齢は二〇代半ばくらいだっただろうか。

この春から俺たちの担任になった、スタイル抜群の理知的かつクールな美女だ。

が、いかんせん性格がキツく、お小言も多いため、一部のM男たちからは絶大な人気があるものの、俺の中では苦手な先生ランキング一位であった。

なので、あまり関わり合いを持たぬよう気をつけてはいたのだが、まさかの失態であ

る。

「で、どういふつもりかしら？ 私の授業は聞くに値しないでも？」

「い、いえ、決してそんなつもりは……」

「ならどういふつもりだったのかと聞いているの。ご丁寧（ていねい）に大口（おほくち）であくびまでしていたわよね？」

「す、すみません……」

「謝（まご）るくらいなら最初（はじめ）からしないようにしなさい。あなたが授業（じゆぎょう）を中断（ちゆうだん）させたせいで、皆（みんな）が迷惑（めいわく）をするの。分（わか）った？」

「は、はい……。以後（以後）気（き）をつけます……」

あはは……、と愛想（あいせ）笑（わら）いを浮（う）かべる俺（おれ）を散々（さんざん）睨（にら）みつけた後（のち）、先生（せんせい）は呆（あき）れたように踵（かかと）を返（かへ）しながら言（い）った。

「明日（あした）の朝（あさ）までに反省（はんせい）文（ぶん）二〇枚（まい）書（か）いてきなさい。いいわね？」

「ええっ!? に、二〇枚（まい）!」

ちよっとぼーっとしてただけで酷（ひど）すぎだろ!? 鬼（おに）か!?

「当然（たうぜん）でしょう? 何か文句（ぶんこう）でもあるの?」

「い、いえ……」

俺（おれ）が青（あお）い顔（かほ）で首（くび）を横（よこ）に振（ふ）ったのを確（かく）認（にん）した先生（せんせい）は、再（ま）び授（じゆ）業（ぎょう）を再（ま）開（かい）させる。

だが当然（たうぜん）、消沈（しょうちん）した俺（おれ）の頭（かぶ）に、その後の授（じゆ）業（ぎょう）内（ない）容（よう）が入（い）ってくることはなかつたのだつた。

「あはは！ まあ元（もと）氣（き）出（で）しなつて！ あたしなんて五（ご）〇枚（まい）の反省（はんせい）文（ぶん）を小（せう）説（たつ）にして出（で）したら、一（いち）〇〇枚（まい）に増（ぞう）やされたことがあつたから大（だい）丈（じやう）夫（ふ）だよ!」

「いや、それは単（ただ）にお前（まへ）がアホ（おろ）だつただけだろ……。てか、無（む）駄（だ）に叩（たた）くな。普（ふ）通（つう）にいてえわ」

ばんばん背中（せなか）を叩（たた）いてくるあおいに、俺（おれ）はジト目（め）を向（む）ける。

下校（げがう）時（とき）。

相（あ）変（へ）わらず消沈（しょうちん）しながら帰（かへ）路（ろ）へと就（つ）いていた俺（おれ）は、隣（りん）を歩（あ）くクラスメイトの群（ぐん）青（せい）あおいから慰（なぐさ）められている最（さい）中（ちゆう）だつた。

あおいは小柄（こがら）だが、ボブカット（bob cut）の似（に）合（あ）うスポーティーな美（み）少女（じよ）で、俺（おれ）とは幼（わか）少（せう）期（き）からの馴（な）染（じ）みかつ悪（あく）友（とも）のような間柄（まがら）の少女（じよ）だ。

見てくれや言（い）動（どう）からも分（わか）るように、明る（あ）く優（やさ）しい性格（せいかく）なので、男（おとこ）女（め）問（もん）わらず人（ひと）気（き）があつたりする。

初対面でも気にせず声をかけていくようなやつだからな。

「あはは、ごめんごめん。あ、そうだ！ そういうことならさ、今日久しぶりにうちに寄っていかない？ 元気が出るように夜ご飯を奢ってあげるよ！」

ぐっと親指を立てるあおいに、俺は再度ジト目を向けて言う。

「いや、奢ってあげるも何も、作るのはおぼさんだろ？」

こいつ、料理は壊滅的だったはずだし。

「まあ細かいことは気にしない気にしない。とにかく一緒に食べようよ！ 一人で食べるよりずっと元気になるしさ！」

「なんだ、気を遣ってくれてるのか？」

「そりゃ遣うよ。だって光太郎はあたしの大事な……友だち、だし」

おい、なんか歯切れが悪いぞ。

目も逸らしやがったし。

まあでも、そういう気遣いは正直嬉しいので、お礼を言っておこうと思う。

「そっか。ありがとな。けどお前、今日なんかの手伝いがあるとかが言ってなかったか？」

「えっ？」

呆然と足を止めるあおいだったが、はっと何かを思い出したらしく、「あーっ!?」と声

を張り上げて言った。

「そうだった!? 今日バレー部の練習試合に出なきゃいけなかったんだ!」

「やっぱり。俺のことはいいから早く行ってこいよ。てか、今から行って間に合うのか？」

もう俺ん家すぐそこだし、ここからだと歩いて三〇分くらいかかる気がするんだけど」

ちなみに、あおいは身体能力とコミュ力が無駄に高いため、よく部活やらバイトやらの

助っ人を頼まれたりしているのだ。

俺も何度かあおいがバレー部の助っ人をしてるところを見たことがあるのだが、打ち

込まれた球を拾いまくっていた覚えがある。

その上、この体格でスパイクを打ち込んだりするのだから驚きだ。

「ごめん、光太郎!?! この埋め合わせは今度きちんとするから!?!」

「おう、気をつけてなーって、もういねえし」

びゅーっと風のように去っていったあおいに、俺はふっと口元を和らげる。

なんかあいつと話していたら、少し元気が出た気がする。

そういうのも、あおいのいいところなんだよな。

小難しいことを考えないというかなんというか。

一緒にいて楽しい相手と言えば、まず間違いないあおいだし。

「げっ!？」

ともあれ、あおいと別れた俺が自宅へと戻ると、見覚えのあるゴミ袋が、玄関脇に置かれていたことに気がついた。

なお、うちはなんの変哲もない二階建ての一軒家で、元々はじいちゃんとはあちゃんが暮らしていた家だったのだが、今は単身赴任中の父さんと二人暮らしというか、実質一人暮らしみたいなものだったりする。

「またかよ……」

がつくりと肩を落とし、俺はゴミ袋に貼られていたカラフルなシールに目を通す。

そこには「ゴミが正しく分別されていません」という文字がでかでかと書かれていた。どうせまたあのババア……じゃなかった。

ゴミ奉行さんが逐一調べやがったのだろう。

てか、この箱どう見てもプラスチックだろ。

なんでプラゴミじゃないんだよ。

意味分からんわー……。

「ただいま……」

ゴミ袋を持ち、ローテンションのまま玄関のドアを開けると、そこにはやはり大量のゴ

ミ袋が散乱していた。

「はあ……」

相変わらず汚ねえな……。

いや、まあ汚くしたのは俺なんだけど……。

と、そんな部屋の有り様に辟易しつつ、廊下にゴミ袋を投げた俺は、自室のある二階へと着替えに向かう。

もちろんはじめからこんなに汚れていたわけではない。

ことの発端は、一年前に同居していたばあちゃんが他界したことだった。

それまで家事の全てをばあちゃんに任せていたため、何をどうしたらいいのか、まったく分からなかったのである。

これで父さんがいてくれたなら、この状況も少しはマシになったと思うのだが、今は単身赴任中ゆえ、たまに連絡はあれど、ほとんど家には帰ってこない。

てか、もう少し息子を気遣えと言いたい。

さすがに放置しすぎだろ、あのおっさん……。

なお、母さんは俺が幼い頃に病死している上、俺は一人っ子である。

というようなこともあり、この壊滅的な有り様になってしまったというわけだ。

「さて、今日の夕飯はどうするかな」

着替え終わった後、俺は冷蔵庫を開けながら独りごちる。

とはいえ、冷蔵庫の中にあるのはペットボトルのお茶と牛乳くらいで、九割方空からという無駄無駄の極極みのような状況であった。

「って、牛乳の消費期限切れてるじゃねえか!？」

その上、食材の管理も行き届いていないというダメダメっぷりだ。

言わずもがな、料理などは一度もしたことがない。

もちろんカップ麺めんは別である。

ケトルでお湯を沸わかして入れるだけなんて、文明の利器すばは素晴らしいよな。

「まあいいや。今日は外で食うか」

「さて、今日はどうしようかなって」

というわけで、お近くのファミレスへとやってきた俺は、メニューを開きつつ、考えを巡めぐらせる。

色々色々と美味おいしそうな料理はあるが、やはりここは男の子の大好物——ハンバーグにする

しかあるまい。

もちろんチーズのたっぷり載のってるやつだ。

ばあちゃんが生きていた頃は、よくそんな感じのハンバーグを作ってくれたのだが、これがまためっちゃくちゃ美味まくてな。

ついつい外食先でも頼たのんでしまうのである。

もちろんばあちゃんのが一番だけど、ここのも結構美味しいので俺は好きだ。

というわけで、俺は備えつけのポタンでウェイトレスさん呼び出し、これを注文する。早く来ないかなあとウキウキしながら待っていると、

「——だから私はまだ結婚けっこんしないって言ってるでしょ!？」

「うん？」

ふいに隣となりの席から女性の大きな声が聞こえ、俺は何ごとかと少し背伸せびをして振り返る。

どうやら隣は男女のペアと、その向かい側に女性が一人の三人組さんごみのようで、今し方大きな声を出したのは、手前にいる女性のようにだ。

「お待たせしましたー」

「うおっ!？」

が、ほぼ同じタイミングで料理が届いてしまい、俺は慌てて元の位置へと戻る。

「あ、あはは……」

「？」

そして不思議そうな顔をしているウェイトレスさんから、まだ鉄板がじゅうじゅう言っているハンバーグを受けとる。

チーズの溶け具合も絶妙だし、実に美味しそうだ。

「いただきます」

隣の会話は少々気になるが、せっかくの作りたてが冷めてはもったいないので、とりあえずいただくとしよう。

「パパたちはお前のためを思って言っているんだ。ほら、パパたちを見てみる。こんなにもラブラブで幸せなんだぞ? なあ、ママ」

「うふふ、そうね。大好きなパパのお嫁さんになれて、ママはとっても幸せよ」

「はは、照れるな。君と出会えて本当によかった。愛してるよ、ママ」

「私もよ、パパ」

——ぎゅっ。

「……」

おい、なんか隣がやべえぞ。

せっかくのハンバーグなのに、隣の会話が気になりすぎて味が分からなくなってきたんだけど……。

ちらり、と再び後ろを見やった俺の目に飛び込んできたのは、三〇代くらいの男女がチユッチュラブラブと抱き合っている姿だった。

「うわあ……」

どん引きである。

これが俗に言う「バカッブル」というやつだろうか……。

「だからそうやって人前でイチャつかないでいつも言ってるじゃない!？」

「何をそんなにムキになってるんだ? パパたちがラブラブだったからこそ、お前が生まれてきたんだぞ?」

「それとこれとは話が別よ! 恥ずかしいからやめてって言ってるの!」

「あらあら、恥ずかしいだなんてそんな……。ママはただパパのことが大好きなだけなのに……くすんっ」

「大丈夫だよ、ママ。この子はちよつと反抗期が長引いているだけなんだ。だからいつかきつと私たちの気持ちを分かってくれる」

「ええ、そうね。ありがとう、パパ」

——ぎゅー。

「ああもう……」

うんざりしたように嘆息しているのは、恐らく娘さんの方だろう。

そりや自分の親がこれだけバカバカしいと思ったら頭を抱えたくなるわ。

「とにかく、お前には絶望的に愛が足りん。だからそんなに余裕がなくなるんだ。パパの言いたいことは分かるな？」

「いや、分かるわけではないでしょ!」

うん、俺も分からんわ。

何言ってるんだろ、あの人。

「ふむ、やはりお前には少々強引な手を使わなければならないようだ。——ママ、あれを」

「ええ、分かったわ」

——ごそごそっ。

「……何よ? これ」

「お前の見合い相手だ。米農家の体でな。これがなかなかいい男なんだ」

「見合いつて……勝手に決めないでくれる!? 私は仕事を頑張りたいって言ってるじゃない?!!」

「だからこうしてお前の意見を聞いて、仕事を両立出来る相手を見つけてきたんじゃないか。家庭に入りつつ、農家の仕事を手伝えればいい。一体何が不満だと言うんだ?」

「全部よ、全部! 私が言いたいのは——」

「ああもう分かった。とにかくお前は一度こっちに帰ってきなさい。話はそれからしよう。こんな都会にいるから、そういう偏った考え方になるんだ」

いや、都会は関係ないだろ……。

「そうよ? 一度帰ってきて、ママたちと落ち着いてお話ししましょう?」

「ふん、そんなお断りよ。大体、私そっちに帰るつもりとかないから」

「あらあら、困ったわ。てっきり帰ってきてくれると思っていたから、ママたちさっきアパートの大家さんにご挨拶して、借家契約を解除しちゃったの」

「はあ?!」「ぶほっ?!」

思わず味噌汁を噴き出す俺。

「う、嘘でしょ!!? そこまでする普通!!? 私もう二五よ!!?」
もう同意というか、同情するレベルである。

「でもでも、ママたちはあなたのためを思って……くすんっ」
「そ、そうだぞ。ママを責めるのなら、代わりにパパを責めなさい」

「パパ……」

「ああ、大丈夫だよ、ママ」

ぼわぼわ、と二人だけのラブラブ空間が形成される。

正直、隕石でも落ちてくれないかという感じだが、それはさておき。

「……はあ。もう嫌、こんな親……。つてこうしちゃうられないわ!!? 今すぐ大家さんに連絡しないと!!?」

そう言つて、恐らくは鞆から携帯を取り出そうとする娘さんが、

「あ、ごめんなさい。そのことなんだけど、実はもう次の入居者さんが決まってるらしくて……」

「えっ!!? そ、そんなはずないでしょ!!? いくらなんでも早すぎるわ!!? 吐くならもつとマシな嘘を吐いてちょうだい!!?」

「いや、それが事実なんだ。なんでも大家さんの娘さんがご結婚されることになったらしくてな。ちようど部屋が空かないかと期待していたらしいんだ」

「はあっ!!? もうどいつもこいつも……。と、とりあえず私、もう一度大家さんに交渉してくるから!」

携帯を持ち、娘さんが焦った様子で店の外へと駆けていく。

なんか、大変そうだなあ……。

まあ、よそさまの家の事情なので、俺に出来ることなんて何もないんだけど……。

「さてと」

娘さんもどこかに行ってしまったし、俺も帰ろうかな。

元々ここにはご飯を食べに来ただけだし。

というわけで、俺は席を立ち、会計を済ませて店の外へと出たのだが、

——どんっ。

「おわっ!!?」「きゃっ!!?」

運悪く店内に入ろうとしていた女性とぶつかってしまった。

「あ、すみません……」

「い、いえ、こちらこそ……」

頭を下げつつ、俺は地面に尻餅を突いていた女性に手を差し伸べる。

「ありがとうございます」

「いえ、それより大丈夫ですか？」

「ええ」

年齢は二〇代くらいだろうか。

ふわふわのロングヘアが似合う可愛らしい女性だ。

服装は初夏らしい涼しげなブラウスとロングスカートの組み合わせで、手足もすらりとして長く、まるでモデルさんのようなスタイルをしている上、何よりおっぱいがめちゃくちゃでかかった。

なので、ついつい目を奪われてしまいそうだったのだが、そこはぶつかってしまった手前、気合いで耐える。

そして偶然とはいえ、こんな綺麗なお姉さんに悪いことをしてしまったと反省していたのだが、

「……白瀬くん？」

「えっ？」

ふいに女性が俺の名を呼び始め、思わず目が点になる。

こんな可愛いらしい知り合いなんていただろうかと眉間にしわを刻んでいた俺だったが、目を凝らしてよく見ると、見覚えのある人物と彼女の姿が重なった。

「もしかして……桜小路先生!？」

そう、俺の苦手を怖い担任こと桜小路怜奈先生である。

日中も見たとおり、いつもはぱりっとスーツを着こなし、さらさらのストレートヘアに眼鏡をかけているため、まったく気づかなかったのだが、恐らく彼女で間違いないだろう。どうりでおっぱいが凄かったわけである。

なんでここに先生が……?! とどこかで聞いたようなフレーズが俺の頭に浮かぶ中、先生がぱっと何かを思いついたような顔をする。

——がしっ。

「えっ?」

「お願い、白瀬くん！ ちょっとだけ話を合わせて欲しいの！ 由々しき事態なのよ！」

「え、あ、あの……」

「お願い！ もうあなたしかいないの！ あとでなんでもお礼をするから、今だけ付き合つてちようだい！」

「え、えつと……はい」

俺の両肩をがっしりと掴み、緊迫した面持ちでそんなことを言ってくる先生に気圧され、思わず頷かされてしまう。

妙にいい匂いが鼻腔をくすぐる中、リアルでなんでもするなんて言う人はじめて見たなあと俺が呆けていると、先生は俺の腕に自分の腕を締め始める。

が。

——むにゆりっ。

「はうあつ!？」

その瞬間、先生のとんでもないおっぱいが俺の腕に当たり、やはりとんでもなく柔らかな感触が腕全体へと広がっていった。

こ、これは言うべきなのだろうか。

いや、だがあの桜小路先生にそんなことを言った暁には、

『何考えてるの!? この変態!』

——ばんっ!

『あうちっ!?!』

ということになりかねない。

「何? どうしたの?」

「い、いえ」

なので、まったくくいで他意はないのだが、俺はこのままおっぱいの感触を堪能……ではなく、口を嚙むことにした。

しかし服の上からなのに、おっぱいってこんなにも柔らかかったんだなあ……。

と、そんな感動を覚える中、俺が連れていかれたのは、最初に案内されたボックス席の隣——つまりは先ほど親子が結婚について激しい言い争いをしていた場所であった。

まさか……っ!?! と嫌な予感が縦横無尽に走る中、俺と腕を組んでいた先生が、彼女のご両親と思しき妙にイチャついてる人たちに向けてこう言った。

「——お待たせ。彼は白瀬くん。実は私たち、婚約しているの!」

……はっ？

はあああああああああああああああああああつっ!!
な、何言ってるの、この人ーっ!!

当然、内心突っ込みの止まらない俺だった。

「は、はじめまして。俺……じゃなく、自分は白瀬光太郎です。よろしくお願ひします」

「ああ、よろしく。私は怜奈の父の令^{れいち}」。こっちは家内の春奈^{はるな}だ」

「ふふ、よろしくお願ひしますね、光太郎さん」

「は、はい。よろしくお願ひします」

ぺこり、と俺が頭を下げると、先生が申し訳なさそうに言った。

「今まで内緒^{ないしょ}にしておいてごめんなさい。まとまったお休みが取れたら、きちんと報告に行こうと思っていたのだけれど」

「ふむ、そうなのかね？」

「えっ？」

——ごっ。



「ぐふっ!? え、ええ、そうなんです……」
てか、肘い……。

しかも結構鋭角に刺さったんですけど……、と一人悶絶する俺をよそに、先生のご両親は驚きつつも、若干安心した様子だった。

「どちらもまだ若く、やはり三〇代くらいに見えるのだが、先生が二五だと言っていたので、実際は四〇代〜五〇代くらいなのだろう。」

「というか、これで四〇オーバーってどういうことだよ。」

お母さんなんて、もうほとんど先生のお姉さんしか見えないんですけど……。

「なるほど。まさかお前に婚約者がいたとはな。そうとは知らず、見合い話を持ち出してすまなかった」

「いえ、私の方こそなかなか伝えられなくてごめんさい。童顔だからちよつと若く見えるかもしれないけど、彼は私の同僚でね。いわゆる職場恋愛というやつなの」

え、何その設定。

「ほう、一緒に働いているうちに惚れ合ったというわけだな」

「ええ、そんなところよ。彼もパパたちに挨拶がしたいって前から言っていたのだけれど、いつも熱心に生徒たちと向き合っているから、なかなか時間を空けることが出来なくてね。」

申し訳ないってずっと悩んでいたの」

「そうだったのか。それは気を遣わせてすまなかったね」

「い、いえ」

むしろ気を遣ってるのは今なんですけどね……。

というか、俺同僚じゃなくて生徒だし……。

そう俺が内心黄昏していると、お父さんが鋭い眼光を向けて言った。

「ところで、君は怜奈のどこに惚れたのかな? 君にとって、彼女の魅力は一体どういったところだい?」

「えっ?」

さすがは親子と言ったところだろうか。

普段先生から向けられている視線がそのまま向けられているような気がして、俺も堪らず萎縮してしまう。

が。

——じろっ。

「……」

横からオリジナルがめっちゃ睨んでるからもう針のむしろって……。

勘弁してくれ……、と滝のような涙を流しつつ、俺はなんとか返答すべく考えを巡らせる。

先生の魅力……魅力……おっぱい？

ちらりっ、と先生の胸元に視線を落とす俺。

しっかしでっけえおっぱいだなあ。

——ぐいっ。

「あいたたたたたたっ!?」

脇を掴るな脇を!?

「どうしたの？ 白瀬くん。いつもみたいに愛を囁いてくれればいいのよ?」

「ひいっ!?!」

笑顔なのに目が笑ってない先生の気迫に圧され、俺は思いつく限り先生を褒め称える。

「や、やっぱりご両親の美しさでしょうか。お顔というのは、心を映し出す鏡とも言えますし、心が綺麗だからこそ、このように美しく在られるのではないかと思います。はい」

なんかどっかの美容部員みたいになってしまったが、まあ一応褒めてるわけだし、これでいいだろ。

どうだとばかりに先生の方を横目で見やった俺だったが、

「ちょっといいかしら?」

先生が硬い笑顔のまま耳打ちしてきた。

（もっと何かあるでしょ!! 外見だけじゃなくて、内面的に好きなのところをどんどん挙げるとか、そういう応用を利かせなさい、応用を!）

（ええ……）

め、めんどくせえ……。

てか、お願いする立場なのに態度でかすぎだろ。

そんなんだからおっぱいまででかくなるんだぞ。

と、腹が立つことこの上なかったが、あとでなんでもお礼（意味深）をしてもらえるらしいので、ここはぐっと我慢だ。

「そういえば、以前私が教師として働く姿が好きだと言ってくれたわよね?」

「えっ?」

そんなこと言ったっけ?

「言ってくれたわよね?（威圧）」

「そ、そうですね! はい、言いました! 大好きです!」

てか、顔こええよ!」
それが教師のする面か!」

「れ、怜奈さんは本当に素晴らしい人だと思えます! 教育熱心ですし、生活態度のなっていない生徒には、きちんと罰を与えるなど、勉強だけでなく、人として成長出来るよういつも気遣っていて、本当に素敵な人だと思えます! 正直、僕の女神です!」

途中で本日出された反省文への抗議も込めておいたが、まあそれは些細な話だろう。

内心やり切った思いの俺は、再度先生の方を横目で見やったのだが、

「——っ!」

すつと何故か赤い顔で視線を逸らされてしまった。

いや、なんでちよつと照れてるんだよ!

あんたが言わせたんじゃ!」

俺がショックを受ける中、お父さんが神妙に頷いて言った。

「なるほど。君の気持ちはよく分かった。しかしお前がそこまで教職に熱を入れているとは思わなかったぞ。白瀬くんを気に入ったのも、彼がお前と同じ熱意を抱いていたからなのだろう?」

「え、ええ、そうかもしれないわ」

こくり、と静かに頷いた後、先生は「それに」と続けて言った。

「熱を入れるのは当然よ。だって学校で生徒たちが頼れるのは、私たち教師だけですもの。だから私たちは、彼らの声に真摯に向き合い、彼らがこの先幸せな人生を歩んでいけるよう、全力で支えてあげないといけない。遊んでなんていられないわ」

「……」

なんだろう。

もしかしたら、俺は先生のことを誤解していたのかもしれない。

いつも無駄に怒ってるから、てっきりそういう性格の人なんだろうなって思ってたんだけど、あれは俺たち生徒のことを、本気で考えてくれていたからこそその厳しさだったんだろうな。

まあ、肘打ちとか脇抓りはどうかと思うけど。

あと顔も怖いし。

「そうか。お前の教育観はよく分かった。それを支えてくれたのが、お前の隣にいる白瀬くんというわけだが……」

そこで言葉を区切ったお父さんは、再び俺に鋭い眼光を向けてこう問うてきた。

「君は、怜奈のことを本気で愛していると思っっているのかな？」
 正直、さっきまでの俺だったなら、適当に答えていたと思う。
 けれど、先生の熱意は本物だったからな。
 ならばこの場を乗り切ることくらいまでは、きちんと付き合っただけでいいと思う。
 だから。

「ええ、もちろんです。怜奈さんのいない人生なんて考えられません。僕には彼女が必要なんです」

俺はそう、力強く頷いた。

「そうか。分かった」

すると、お父さんは腕を組み、うーんと眉間にしわを寄せる。

「しかし困ったな。てっきり婚約者はいないものだと思ひ、怜奈の借家契約を解除してしまつたんだ」

ああ、そういえばそんな話があつたな。

「で、でしたら再契約をされたら——」
 と。

「——よし、せっかくだ。この際、同棲しなさい」

「「えっ!?!」」

ど、同棲!?

いや、それはさすがに無理だろ!?

先生からもびしつとやってやってくれと目配せする俺だったが、

「——ええ、分かったわ」

つて、先生!?

あんたも何を言っちゃってんの!?

予想だにしていなかった展開に、ずんむりと両目が飛び出しそうになる。

「!」

が、そこではたと先生が至極冷静な面持ちをしていることに気づき、俺はもしかやと考えを巡らせる。

恐らく何か策があり、この場を乗り切るためにわざと頷いたのだろう。

「よし、決まりだ。では見合いの方は私から断りの連絡を入れておこう。いやあ、めでたい話を聞いてよかった。なあ、ママ」

「ええ、そうね」

うふふあははとご両親が喜びの表情を見せる。

どうやら話が一段落したらしい。

「やれやれと俺が小さな息を吐いていると、すでに夕食を終えていたお二人が席を立ち始めた。

「ではあとはお若い二人に任せるとしようか」

「ふふ、そうね。じゃあまた近いうちに顔を見せるから」

「ええ、あとで新居の住所を教えるわね」

「ああ、楽しみにしているよ。じゃあ白瀬くん……いや、光太郎くん。今後とも怜奈をよろしく頼むよ」

「あ、はい。こちらこそありがとうございます」

笑顔で去っていくご両親に深く頭を下げ、俺たちはその姿が店の外へと消えていくのを、静かに見送ったのだった。

「ど、どどどうしよう!?!」

「いや、とりあず落ち着いてください……」

はあ……、と呆れ気味に肩を落とす俺。

元来ならば、ここは互いの健闘を称え合う場面なのだが、正直それどころではなかった。

原因は、先生がなんの考えもなしに、同棲の件を領いてくれやがったことである。

そう、策など何もありませんかったのだ。

「じゃあなんでどや顔で領いてたんだよという感じなのだが、たぶんこの人、変なところで見栄を張る性格らしい。

一瞬でも見直した俺の感動を返して欲しいものである。

「まあ、言っちゃったものは仕方ないですし、何か対応策を考えるしかないのではないかと……」

「そ、そうね。確かにあなたの言うとおりだわ。バレたらまた何を言われるか分からないし」

「そうですね。でもどうしてご両親はあんなに結婚を急いでるんですか?」

「……ふう。こうなってしまう以上、あなたには事情を説明するしかないよね」

「ええ、その方が力になれると思うので」

そう促すと、先生は伏し目がちに事情を話し始めてくれた。

「私の地元はね、両親を含め、一〇代で結婚する人たちが多い田舎町なの。遅くても二〇代の前半くらいまでには皆結婚して、子どもを産んでいるわ」

「へえ、じゃあ学生結婚が多い感じなんですか？」

「ええ、そうよ。就職も、農家とか家業を継ぐ人たちが多いの。だから私みたいに都会に出る人は少なくて、このご時世にまだ家庭に入るのが女の幸せだと思ってるのよ」

「なるほど。そういうことですか」

「ええ。以前から結婚に関しては色々と言われていたのだけれど、最近は本当にしつこくてね。まああの町だと、私の年齢くらいで結婚する人は希だから、そういう焦りもあったのでしょうか。おかげで業を煮やした両親に借家契約を解除された上、お見合いの席を設けられてしまったというわけ」

「で、たまたまそこに俺が居合わせたと」

「ええ、そうなるわ。その、巻き込んでしまつて本当にごめんなさい……」

「あ、いえ、それはまあ仕方ないんですけど……なんでさつき領いたんですか？ しかもどや顔で」

そう、問題はそこである。

先生があそこで断固として反対の意を示してくれていたのなら、こんなことにはなつていなかったのだから。

「……ごめんなさい。それは本当に反省しています……」

しゅん、と申し訳なさそうに小さくなる先生に、俺も言った立場ではありながら、なんとも言えない気まずさを覚える。

いつもはもつと怖いというか、威厳に満ち溢れている人なので、こういう気弱な感じはどうにも調子が狂ってしまうのだ。

ゆえに、俺は些か重くなつてしまった場の雰囲気を変換させるため、別の話題を彼女に振る。

「あー……その、先生は誰かい人とかいないんですか？」

「いればこんなに苦労はしないわ。それと、今のはセクハラだから気をつけなさい」

「あ、はい……。すみませんでした……つて、いやいや、なんで気を遣つた俺が怒られているんですか……」

ちゅー、とドリンクバーのアイスコーヒーを両手で飲む先生にジト目を向ける。

てか、どうでもいいけど砂糖とミルク入れすぎだろ。

ブラックが苦手なら無理して飲まなきゃいいのに。

小さく息を吐きつつ、俺は先生に言った。

「けどなんか意外です。先生って、なんでもそつなくこなす完璧超人みたいなイメージがあったので」

「まあ学校ではそうでしょうね。そう在ろうと必死に努めているもの。けどプライベートなんてこんなものよ」

「なるほど。でも余計な話、いつもそんなに気を張っていたら疲れませんか？」

「何？ お説教？」

あからさまに不快感を露わにする先生に、俺は首を横に振って言う。

「い、いえ、そういうことではなくて、あんまり根を詰めすぎていると、お仕事にも支障が出てくるんじゃないかなって……」

「まあ、そうかもしれないわね。でも私は教師だもの。教師はいつだって生徒たちの模範でなければならぬわ。たとえ無理をしても、あなたたちの前でだけは「教師」として在らなければならないのよ」

「どうしてそこまで……」
と。

「……私ね、教師になるのが夢だったの」

「えっ？」

ふいに先生が窓の外に視線を向けつつ、そう語り始めた。

「きっかけなんて些細なことよ。学生時代にとでもお世話になった先生がいて、彼女のよな教師になりたいって思ったの。あなたの言う完璧な私のイメージも、単に彼女を真似ているだけ。だからこうやってぼろが出たりするのでしょね」

「いや、別にぼろなんて……。まあコーヒーに砂糖とミルクは入れすぎだと思えますけど……」

「そ、それは仕方ないじゃない!? 私、苦いの苦手なんだから!」

「ええ……」

ならなんで飲んでるの……。

「あの、別に苦手ならココアとかにしておいた方がいいんじゃない……」

「それじゃダメなの！ コーヒーの方が大人っぽく見えるでしょ!」

「先生エ……」

どうしよう。

先生のイメージが加速度的に崩れていくんだけど。

言われてみれば、確かにほろ出まくりだわ……。

ぶんぶん頬を膨らませている先生に、俺は尋ねる。

「あの、もしかしてそのコーヒーも、例の先生っぽく振る舞うためですか？」

「ええ、もちろんよ。毎朝時間をかけて髪の毛をストリートにしているのも、ちょっと細めの目で眼鏡をかけているのも、全ては彼女のようなクールビューティーを目指しているからにほかならないわ」

「そ、そうなんですわ」

なんか聞いちゃいけないことを聞いてしまった気がする。

これ、きっと明日から先生のことをまともな目で見られなくなるだろうなあ……。

あ、今日もクールビューティー目指して頑張ってるな、みたいな……。

「ええ、先生は本当に素敵な人だったの。いつもクールで笑うことなんてほとんどなかったのだけど、口を開けば生徒のことばかり気にかけていたわ」

「へえ、本当に今の先生みたいな感じの人だったんですね」

「いいえ、私なんてあの人の足もとにも及ばないわ」

「そうかぶりを振った後、先生はどこか懐かしそうに口を開く。

「昔ね、私の友人に、身体が弱くて学校を休みがらだった子がいたの。なんとか保健室登校をして、出席日数はぎりぎりだったのだけど、このままで学力的に進級が厳しいという話が出たわ。もちろん私は彼女と一緒に進級したかったから、別のクラスではあったのだけど、当時担任だった先生に相談したの。私の話を聞いた先生は、一言、任せなさい」とだけ言ったわ」

「そ、それで？」

「ええ。先生は毎日その子のためにつきっきりで勉強を教えてくれた。朝から晩まで、暇を見つけては、その子のところに通って勉強を教え続けてくれた。でも先生だって人間だもの。無理をし続けていけば、いつかは身体に限界が訪れるわ。ある日の放課後、私は人知れず辛そうに頭を押さえている先生を見つけたの」

「えっ？」

「私は慌てて駆け寄ったわ。でも先生はこれから彼女の家に寄って勉強を教えないといかないからって、さらに無理をしようとしていた。だから私は言い出しつべなのに聞いたの。どうしてそこまでしてくれるのかって。すると、先生は珍しく微笑んで答えたわ」

「……っ」

ごくり、と固唾を呑む俺に、先生は言った。

「決まっているでしょう？ だって私はあなたたちの先生だもの。たとえ無理をしてでも、生徒の幸せのために頑張るのが先生なのよ。って」

「め、めちゃくちゃいい先生じゃないですか」

「ええ、とつても。まあとにかくそういうわけで、友人は無事進級出来て、私はあの時の先生にとつても感銘を受けたので、一生懸命頑張つて教職に就いたというわけ。毎日色々大変なことはあるけれど、とつても充実しているし、私はこの仕事が好きよ」

なのに、と先生は口調に悔しさを滲ませて続ける。

「親がそうだったから、町の皆がそうだったからって、せっかく掴んだ夢を諦めて、好きでもない人と結婚しろだなんて、そんなのあんまりじゃない……っ」

「……」

いつもは鋭い目つきでお小言ばかり言ってくるあの桜小路先生が、今は微かに声を震わせ、目元には薄らと涙まで浮かべている。

そんな彼女の姿は、なんといかとても弱々しくて、おこがましいことなのかもしれないけれど、放つておけないとすら思ってしまった。

嫌いだっただけはずなただけだな……。

顔を合わせれば服装を正せだの、成績が落ちているから予習復習をきちんとしろだの、小うるさいことばっかだったし。

でも……。

「先生は、教師を続けたいですか？」

「当然でしょう!? まだまだ生徒たちに教えることだつてたくさんあるし、それにやつとクラスの子たちのことも把握出来てきたところなのよ!? 途中で投げ出すなんて絶対に嫌! そんなのあなたたちにとつても迷惑じゃない! どんな手を使つても、あなたたちだけは絶対に私が責任を持って見届けるわ! だって私はあなたたちの先生なんだから!」

「そう、ですか……」

この先生は、本当に俺たちのことを第一に考えてくれているんだよな……。

まあ、多少言葉足らずではあるんだけどさ。

顔も怖いし。

おっぱいでかいし。

はあ……。

俺は小さく嘆息した後、「あーもう仕方ない!」と覚悟を決め、先生に言う。

こんな話を聞かされたら、協力しないわけにはいかないだろうが。

「分かりました。ならとりあえず落ち着くまで、俺の家で一緒に暮らすつてのはどうでしょうか？」

「えっ……」

どういうことかと驚いたような表情をする先生に、俺は続ける。

「今日の話の流れだと、どう考えてもこの状況を乗り切るには、本当に同棲するしかないと思うんです。先生も知ってるとは思いますが、うちは一軒家な上、今父親がほとんど帰ってこない状況なので、部屋も空いています。だから先生が来ても全然大丈夫ですし、ご両親を一回ご招待するまでの期間限定つてことにすれば、先生自身の精神的な負担も軽くなるんじゃないかなと。さすがにご両親も、きちんと同棲している様を見せれば安心すると思うので」

「で、でもそんなの迷惑でしょう？ それに私たちは仮にも教師と生徒なわけだし……」

「いや、まあそうなんですけど、そこは非常事態ということと……。あと迷惑という話に關しては、俺の方もちよつとお願いしたいことがあります……」

「お願いしたいこと？」

不思議そうに小首を傾げる先生に、俺は「ええ」と頷いて言う。

「実は一年前に同居していた祖母が亡くなつて以降、まったく家事が出来ていない状態にして、家の中が壊滅的な有り様になつてるんですよ……。今日ここに来たのも、とても炊事を出来るような状態じゃなかったからです」

「なるほど。つまり同棲の交換条件として、私に家事を頼みたいというわけね？」

「はい、そのとおりです。そこをお願い出来るのであれば、俺の方は全然構いません。あ、もちろん変な噂が立つても困ると思うので、ご近所さんとかには、表向き家政婦として住み込んでもらつていてということにでもすればいいのかなと」

「そうですね。確かにそれなら同棲していてもおかしくはないでしょう。お父さまがお忙しいということも、周囲の方々なら知つていてしょうし」

「ええ。なので、その間にでも何か教師を続けられるような案を考えられたらいいなと」

俺がそう告げると、先生は申し訳なさそうに上目を向けてこう尋ねてきた。

「でも、本当にいいの？ 巻き込んだ私が言うのもなんだけれど、ここで見放してくれたら、あなたは自由になれるのよ？」

その問いに、俺はふつと口元を和らげて言った。

「まあ、もうここまで来たら最後まで付き合いますよ。それに、俺も先生には元気に先生をやつて欲しいですしね。気弱な感じの先生だと、なんか調子が狂うので」

「あら、それは一体どういう意味かしら？（じろりっ）」

「あ、いえ、別になんでもないです……」

一転して鋭い眼光を向けてくる先生の視線から、逃げるように俺が目を逸らしていると、

「……ふふっ」

「！」

珍しく先生の口元に笑みが浮かび、俺は思わず見惚れてしまった。

いつも怖い顔をしているから、てっきり笑わない人かと思っていたのだが、こういう顔もするんだな。

なんか意外だ。

しかも元が美人なので、正直めちゃくちゃ可愛いし。

でも思い返せば、あの怖い顔も、結局はそう在ろうとしていただけであって、元来の先生はそういう感じじゃないんだよな。

見栄を張って苦手なコーヒーを飲んだりするような人だし、もしかしたら意外と可愛いらしい人なのかもしれない。

と、そんなことを思っていたら、先生が俺の視線に気づいたらしい。

「……何かしら？」

すっと笑顔を引っ込め、いつもの怖い顔でそう問いかけてきた。

「あ、いえ、先生も笑ったりするんだなあ」と

「あなた、私をなんだと思ってるの？」

「す、すみません。学校ではあんまり笑ったところを見たことがなかったので……。あ、でも凄く可愛いかったですし、絶対笑った方がいいですよ」

「な、何を言ってるの!? まったく、あまり大人をからかうものではないわ!?」

もうっ！ と恥ずかしそうにする先生の意外な一面を見られた俺は、やっぱり実は結構可愛らしい人なのではと思ったりしていたのであった。

第二章 同棲生活の始まり

翌日の授業中。

黒板を背に、先生がクラスの男子に問う。

「ここは以前教えたはずだけれど、きちんと復習はしているのかしら？」

「は、はい、一応……」

「ならどうして答えられないの？」

「すみません……」

「……ふう。もういいわ。座りなさい」

相変わらずスーツをビシッと着こなし、クールで笑顔の一つも見せない先生の姿に、俺は昨日の恥じらいを見せていた美女が、本当に彼女と同一人物なのかを疑問に思っていた。ただあのストレートヘアと眼鏡が、クールビューティーを演出しているためだけのものだと知った今では、なんとも微妙な心境なのだが。

しかし何故^{なぜ}そこまでして威厳^{ひびく}を出そうとするのか。

先生曰^{いわ}く「教師は生徒を教え導く立場なのだから、その線引きはしっかりしないとダメ



でしよう？」ということらしい。

まあ言いたいことは分かるんだけど、しっかりしすぎたおかげで、今までの俺は先生への好感度が決していいとは言えなかったからな。

それも善し悪しだと思う。

——キーンコーンコーンコーン。

「じゃあ今日の授業はここまでにしましょう。挨拶をお願いします」

「起立——礼」

日直の号令で先生の授業が終わり、皆がそれぞれ一息吐く。

先生の授業はほかの授業と緊張感が違うので、皆もやっと終わったと安堵している様子だった。

「……あら？」

最中、先生が回収済みだった小テストを持って帰ろうとするものの、ほかの教材で両手がいっぱいだったことに気づく。

こういう時は大体日直か、日にちに因んだ出席番号の生徒が手伝わされたりするのだが、「えっと、今日は金曜日だから……白瀬くん。ちょっとこれを運ぶのを手伝ってもらえるかしら？」

「えっ？」

何故かまったく関係ない俺がご指名を受けてしまった。

曜日を選ぶというのも珍しいことなのだが、どうして金曜日だと俺になるのだろうか。

当然、その疑問はほかの生徒たちも抱いたようだったが、下手なことを言っただけで先生に睨まれては堪らないと、皆突っ込まないようにしていた。

まあきつと理知的な先生のことだ。

俺には見当もつかないのだが、英語教師らしい、金曜日に因んだ単語の繋がり的なもので決めたのだろうか。

「白瀬くん、聞いているの？」

「あ、すみません。今行きます」

ともあれ、さっさと行くとしよう。

「えっ？ 意味なんてないわよ？」

「はっ？」

その後、廊下を歩きつつ、一応先生に金曜日と俺の繋がりを尋ねてみたのだが、まった

く関係がなかったことを知り、思わず目が点になっていた。

「か、理知的だとか褒めた俺はどうすればいいんだよ。」

「それはそうと、明日は本当に大丈夫なのかしら？」

「あ、はい。引越しの件ですよね？」

「ええ。せっかくの休みなのに、本当に手伝ってもらってもいいの？」

「もちろんです。とくに予定もないですし、その方が早く終わるじゃないですか」

「そう。ならお言葉に甘えさせてもらおうわ。詳しくは後ほどメールするから」

「分かりました」

ちなみに、昨日連絡先を交換済みなのだが、先生のメールの送り方が微妙に面白かったりする。

というのも、大体顔文字や絵文字が変な感じで装飾されているからだ。

たとえば『よろしくお願するわ』のあとに郵便局の絵文字を大量に貼りつけてきたり、『迷惑じゃないかしら？』のあとに何故か警官の顔を貼りつけたりするのである。

ただいつもは主に電話の方を使っているらしく、携帯でメールをした男は、お父さん以外だと俺がはじめてなのだとか。

微妙に嬉しかったのは内緒である。

「じゃあこのテストは机の上に置いておきますね」

小テストの束を職員室まで運んだ俺は、そのままそれを先生の机の上へと置く。

今まで注意して見たことはなかったが、よく整頓された綺麗な机だ。

「ええ、ありがとう。とても助かったわ。それと、帰りに保健室に寄ってもらってもいいかしら？」

「え、保健室ですか？」

俺が小首を傾げていると、先生はどこか恥ずかしそうに視線を逸らして言った。

「え、えっと、その、ちょっとしたお礼をね、預けてあるの」

「お礼？」

なんのことだろう？ と俺が瞳を瞬かせていると、先生はさらに顔を赤くさせて声を張り上げた。

「と、とにかく行けば分かるから！ はい、分かったらさっさと行く！ でも廊下は走らないように！ 分かったわね!!」

「え、あ、はい!? わ、分かりました!」

「失礼しまーす」

というわけで、言われるがまま保健室へと赴いた俺は、一言断ってからその扉を開ける。

「——おや？ 体調不良かね？」

すると、先生と同年代くらいであろう白衣の女性がこちらを振り向き、ドーナツらしきものを頬張りながらそう尋ねてきた。

養護教諭の榛素子先生だ。

常に淡々とした感じの美女であり、集会の時などを除き、大体いつも何かを食べている気がする。

その上、桜小路先生同様、やたらとスタイルがよく、色々と無防備にエロい感じの人なので、仮病で来訪する男子生徒たちが無駄に多いらしい。

まあ、確かに気持ちは分からなくはない。

だってあの人、スカート短すぎて普通にパンツ見えそうだし。

って、よくよく考えてみたらとんでもない恰好だな!!

白衣を羽織っているとはいえ、胸元はほぼ下着みたいな感じだし、スカートなんか太も

もの上くらいの丈だし!?

え、この学校の風紀はどうなってるの!?

「あ、いえ、桜小路先生にこちらに寄るよう言われました」

「ああ、ではキミが白瀬くんか。怜奈から話は聞いているよ。なんでも彼女と同棲するのになつたのだろう?」

「え、なんで知ってるんですか!？」

まさかもう学校にバレたとか!?

てか、まだ同棲始まってすらいないんですけど!?

愕然と驚く俺に、榛先生はやはり淡々とうこう言ってきた。

「そんなに慌てずとも大丈夫だよ。私と怜奈は同級生でね。昔から何でも話し合える親友同士なんだ。だからこのことを知っているのは私だけだよ」

「あ、そうだったんですね……」

学校にバレたわけではないと知り、俺はほっと胸を撫で下ろす。

しかし学生時代からの親友同士が同じ学校で働くなんて、そんな偶然もあるんだな。

世の中狭いもんだと俺が思っていると、榛先生がそのすらりと伸びた脚を組み直して言った。

「まあ立ち話もなんだ、こっちに來て座りたまえ」

「あ、はい」

「頷き、俺は榛先生の前にあつた丸椅子へと腰掛ける。」

「ふむ」

「えっ!?!」

すると、榛先生がずいっと俺の顔を覗き込んできた。

途端に何やらいい匂いが鼻腔をくすぐり、俺の顔にも熱がこもる。

しかし問題はそれよりもこっちである。

——たゆゆんっ。

でかい。

とても養護教諭とは思えないような胸元の開いた服や、前屈みの姿勢のせいもあってか、ついついおっぱいに目がいつてしまう。

もしかしたら桜小路先生よりもでかいのではなからうか。

いや、あの人はあの人でかなりの大きさなのだが。

というか、本当にすげえな!?

そりゃ皆仮病にもなるわ!?

どこに視線を向けたらよいのかと内心焦りを感じる中、榛先生はふむふむと俺の観察を続ける。

心なしか、見ても構わないとばかりにおっぱいやらなんやらを強調しているようにも見えた。

「ふふ、なるほど。その可愛い反応を見るに、キミは女性に対する免疫があまりないようだね」

「えっ!?! い、いや、その……なんていうか……すみません」

すると、榛先生はすつと俺から顔を離しながら、表情一つ変えずに言った。

「——ということとは、だ。セックスの経験もないと見ていいのかな?」

まさかの童貞確認!?

「ちよっ!?! い、いきなり何を言ってるんですか!?!」

当然、俺は真っ赤な顔で異議を申し立てる。

だが榛先生に慌てる素振り(そぶ)はまったく見えず、やはり淡々とドーナツを頼張りながら言った。

「いや、大事なことだろうか？ 飯にも性的経験のない友人が、性欲旺盛(ちゆうせい)な年頃(としごろ)の男子と一つ屋根の下で暮らすのだから？ さすがの私も心配になるさ」

「そ、そりやそうでしょうけど……つて、うん？」

ちよつと待て。

今なんかもの凄く大変なことを聞いてしまった気がするのだが……。

「え、あの、今の性的経験がない……つていうのはもしかして……」

「うん？ ああ、恰(ちや)奈(な)のことだよ。あいつは紛れもなく処女(ぢよ)だぞ。親友の私が言うのだから間違(まちが)いない」

「いや、何普通(なんふつ)にぶっちゃけちゃってるんですか!? そ、そういうのつてデリケートな話題(わだい)というか、ぶ、プライベートの侵害(しんがい)ですよ!」

さすがに動揺(どうぶゆ)しすぎたのか、口調(くこう)が少々(せうせう)覚束(おぼつか)なくなってしまった。

「ふむ。そういうことならば、私が処女(ぢよ)だということもぶっちゃけてしまおうか。これでフェア(fair)というものだろうか？」

「ちよつ!? あ、あんたはさつきから何を言ってるんですか!? そもそもフェアとかそ

いう問題(もんだい)じゃないですし!」

「はっはっはっ、キミは反応(はんおう)が面白いね」

「いや、笑いごとじゃないですよ!」

そう突(つ)っ込み(こみ)を入れるも、榛先生(はしんせい)は相変(あひ)わらずとぼけた外人(がいじん)みたいに、H A H A H A と笑(わら)っていた。

まったくなんて人(ひと)だ。

やべえのは服装(ぶそう)だけじゃなかったらしい。

色んな意味(いみ)で要注意(ちゆうい)人物(ぶつ)である。

と、まあ榛先生(はしんせい)のことはさておき。

それにしても、まさか桜小路先生(さくらこうじ)が処女(ぢよ)だったとは思(おも)わなかった。

見た目は抜群(ぼつぐん)にいいし、てっきり元彼(もとか)の一〇人(じゅうにん)くらいはいるのかと思(おも)っていたのだが、やつぱりあのガード(ガード)の堅(かた)さだろうか。

いや、もしかしたら教職(きょうしやく)優先(ゆうけん)で、男(おとこ)にうつつを抜(ぬ)かす余裕(よゆう)なんてなかったのかもしれない。

そんなことを考えていると、榛先生(はしんせい)が背(せ)もたれに深く体重(たいじゆう)を預(たづ)ねながら言った。

「まあただ、私(わたし)だって誰(たれ)にでもこんな話(わら)をするわけじゃないよ。キミだから言ったんだ」

「? どういうことですか?」

手に持っていたドーナツを机の上に置くと、榛先生は頬に手を添えながら、俺を見据え
て言う。

「彼女が処女だと知れば、キミは手を出さないだろうということさ」

「えっ?」

そう言うと、榛先生は椅子から腰を上げ、薬品棚へと歩きながら話を続けた。

「よく考えてもみたまえ。たとえは怜奈が経験豊富なピッチだったとしよう。そうだった
場合、キミは少なからず期待してしまうはずだ。もしかしたら、自分にも手ほどきをして
くれるのではないかと」

「うつ……ま、まあ確かに……」

蠱惑的な笑みを浮かべ、夜のレッスンとばかりに俺の上に跨りながら、「私が教えて
あ・げ・る」とブラウスのボタンを一つずつ外していく桜小路先生の姿を思い浮かべ、
俺はごくりと生唾を呑み込む。

同棲の話が決まってから、そういうことをまったく考えていなかったかと言われると嘘
にはなるし、正直期待している自分がいたのも事実だ。

だが確かに処女だと聞いた今では、至極残念なことに、その妄想も儂く崩れ去ってしま

っていた。

「ああ、そうだろうとも。処女だと聞いてしまえば、よほどの鬼畜でない限り、はじめて
は好きな人とさせてあげたいと思うはずだからな。——よほどの鬼畜でない限り、ね」

「なんで二回言ったんですか……。念押ししなくても割と誠実な人ですよ、俺は……」

そうジト目を向ける俺に、榛先生はふっと口元に笑みを浮かべて言った。

「ああ、そうだろうね。私もそう思うよ。だから一応念のためにというわけさ」

「さいですか……」

どうやら一般人の感覚とはだいぶずれているようだが、それだけ親友の桜小路先生を心
配しているのだろう。

てか、下宿先を提供するくらいの軽い気持ちで提案しちゃったわけだけど、確かに年頃
の男女が一つ屋根の下で暮らすんだもんな。

そりゃ心配にもなるわ。

「でもその、ちよつと意外でした。お二人ともお世辞抜きで美人だと思いますし、学生時
代だって相当モテたんじゃありませんか? 実際榛先生のところには、しょっちゅう男子た
ちが来ているみたいです」

「まあキミくらいの年頃の男子は、女体に興味津津だろうからね」

「くっ、否定出来ないところがまた……っ」

俺が悔しげに唇を噛み締めていると、榛先生は再度椅子に腰を下ろし、これまたセクシ
ーに脚を組み直して言った。

「だがすまないね。私はなかなか異性に興味を持ってない上、どちらかと言うと年上が好き
らしいんだ。だからキミの気持ちには応えられそうにない。許してくれたまえ」

「いや、なんで俺がフラれたみたいな感じになってるんですか……」

がっくりと俺が肩を落としていると、榛先生がふふっと笑って言った。

「しかしキミは面白い子だね。ふむ、キミのような子なら年下でもいいかもしれないな」

「そう言っただけでまた俺をからかうつもりでしょう？ その手には乗りませんよ」

はあ……、と嘆息する俺に、榛先生は再び微笑を浮かべて言う。

「ふむ、怒らせてしまったかな？ それはすまなかったね。これで許してくれたまえ」

「？」

そう言うと、榛先生は俺の手をとり、

——むにゅっ。



「……はっ？」

それを自分の胸へと押しつけやがったではないか。

「はああああああああああああああっ?!」 ちよ、何してるんですか!？」

当然、シヨックで取り乱す俺に、榛先生は淡淡と言う。

「いや、こうしたら機嫌が直るのではないかと思つてな」

——むにゅむにゅ。

「い、いやいやいやいや!? そもそも別に機嫌が悪くなつてたわけじゃないですし!？」

「おや、そうだったのか。それは失礼した。で、どうだね?」

「えっ?」

「私の胸の感想を聞いているんだ」

「そ、そりやすげえ柔らかいですけど……じゃなくて!？」

「はっはっはっ、喜んでもらえて何よりだ。キミも光榮に思いたまえ。何せ、私のはじめての男になつたのだからな」

「ちよ、誤解を招くような言い方はやめてください!？」

慌てふためく俺の反応が面白かつたのだろう。

榛先生は未だ俺の手をがっちりとおっぱいに押し当てたまま、けたけたと愉快そうに笑

つていた。

「さて、冗談はこのくらいにしておこうか」

そう言つて、榛先生が俺の手を離す。

男の子の悲しい性とでも言おうか。

正直、心の底で残念がつている自分がいました。

「うう、純真な男心が弄ばれた……。でもありがとうございます……」

「うむ、正直なのはいいことだ。私はそういう素直な子が好きだよ」

「それはどうも……」

些か疲労感を覚えつつ、俺がそうお礼を言うと、榛先生が何やら包みを取り出して言つた。

「で、本題に入るのだが、実はこれを渡すよう頼まれていてね」

それは水色の布に包まれた、見覚えのある両手のひらサイズくらいの代物だった。

「これって、もしかしてお弁当ですか?」

「うむ、まさしくそのとおりだ。怜奈の手作りだぞ?」

「手作り!？」

マジで!？」

「ああ。実は怜奈がキミを巻き込んでしまったことに罪悪感を覚えているようですね。何かお詫びが出来ないかと相談されたので、ならばと私が提案したんだ」

「そんな……。俺が言い出したことだし、別に気にしなくてもいいのに……」
 なんか気を遣わせて申し訳ないな……。

「まあそう言わないでくれたまえ。あいつは真面目なやつだからな。——ほら」
 「ありがとうございます」

榛先生からお弁当を受け取ると、それはずっしりと重たかった。

きつと育ち盛りの俺のことを考えて、たんまりと料理を詰め込んでくれたのだろう。

「キミの家庭事情のことは私も聞いていたからね。だから恐らくはパンやコンビニ弁当ばかりなんじゃないかと思ひ、怜奈に提案してみたわけだよ。というわけで、どうだい？ 美女の手作り弁当というのはなかなか新鮮だろう？」

「え、ええ、まあ」

というか、そんなもの今まで食べたことないわ。

俺が小さい頃は、たぶん母さんも作ってくれたんだろうけど、ほとんど覚えていないからな。

まあばあちゃんは毎日作ってくれたんだけど……って、あれ？

そういうえば、こういう手作り料理って、ばあちゃんが死んでからずっと食べてなかった気がするなあ……。

「なんだ、随分味気のない反応だな。もつと飛び跳ねて喜ぶと思っていたのだが、もしかして味の心配をしているのか？ それなら心配は無用だ。何せ、怜奈は料理上手だからな」

「あ、いえ、なんかびつくりしちゃって。手作りなんて久しぶりだったもので」

「ふむ、そうだったのか。ならば喜びたまえ。あいつは基本自炊派だからな。これからは毎日手料理が食べられるぞ」

「手料理が毎日!？」

「ああ、そうだと。まったく羨ましい限りだよ。怜奈の手料理なら、私だって毎日食いたいくらいだからな。というわけで、今度私を夕食にでも招待してくれたまえ」

「はは、分かりました。ならその時はしっかりとおもてなしさせていただきますんで」

「ああ、楽しみにしているよ」

そう微笑んだ後、榛先生は机の上のデジタル時計を見やって言った。

「さてと、ではそろそろ戻りたまえ。このままでは食べる前に昼休みが終わってしまうからな」

「はい、ありがとうございました」

「ふふ、礼なら作った本人にでも言つてやつてくれたまえ。キミくらいの子は、何が好きかと散々頭を悩ませていたみたいだから」

「はい、分かりました」

やっぱり桜小路先生は優しい人なんだろうな。

ただ表現の仕方がちよつと不器用というか、いい先生で在ろうとして、肩肘張りすぎた結果、無駄に威圧的になってしまっただけというか。

でもこうやって怖かった先生の別の一面を知ることが出来た今では、意外とおちやめというか、正直可愛く見えていたりもするから不思議だ。

ともあれ、大切に食べるのもちろんのこと、あとできちんとお礼を言つておこうと思ふ。

「じゃあ俺はこれで。わざわざありがとうございました」

再度お礼を言いつつ、俺は丸椅子から腰を上げる。

すると、榛先生が別のチョコが塗られたドーナツを頬張りながらこう言ってきた。

「ああ、そうだ、白瀬くん。もし同棲中、キミがどうしてもムラムラした時は、いつでも私のところに来たまえ。特別に処理してやろう」

「んなつ!? ちよ、いきなり何言ってるんですか!」

危うく弁当を落としそうになつたわ!?

一体何考えてるんだ、このエロ養護教諭(処女)!!

「いや、さすがに怜奈だと淫行になつてしまうのでな。その点、私であれば医療行為という事でなんとか——」

「なるわけないでしょ!? 普通に淫行ですよ!」

「ふむ、それは残念だ。だがまあバレなければ大丈夫だろう。というわけで、いつでも待ってるぞ、童貞くん」

「いや、行きませんって!? てか、誰が童貞だ!」

そう鋭い突っ込みを入れつつ、俺は保健室をあとにしたのだった。

そうして教室へと戻つた俺は、途中で買ったパックのお茶にストローを差すと、さつそく先ほどのお弁当の包みを解く。

すると、恐らくは先生の私物であろう楕円形のお弁当箱が、こぢんまりとその姿を現したのだが、

——びよぶー。

「……」

そこにはぶーっと膨れた表情の可愛らしいおでぶひよこキャラとともに、びよぶーと丸字で書かれていた。

そう、いわゆるキャラクターもののお弁当箱だったのである。

いや、可愛いけども!? と微妙にシヨックを受ける俺。

ただ男子高校生のお弁当箱としては、ちよつと使いづらいといつかなんというか……。

むしろ先生のイメージでもないのだが、もしかして意外と可愛いもの好きなのだろうか。と。

「あれ？ 光太郎がお弁当なんて珍しいね？」

あおいがやつほーと手を振りながら、お弁当の包みを片手に近づいてきた。

「あ、ああ、まあな」

「へえ、自分で作ったの？」

「えっ!? お、おう、俺だってほら、たまにはな？」

「ふーん、光太郎が料理ねえ？」

やべ、めっちゃ疑われてる……。

まあ俺ほとんど料理しないからな……。

「つて、びよぶーじゃん！ 可愛い！」

しかもなんか食いつかれたし!?

「い、いや、探したらこれしかなくてさ。時間もなかったし、もうこれでいいかなって」

「へえ、そうなんだ？ もしかしておばあちゃんのやつ？」

「お、おう、たぶんな」

「ふーん。でも光太郎のおばあちゃんって、こういうの使ってるイメージなかったんだけどなり？」

——じー。

「そ、そうか？ 可愛いキャラだし、意外と気に入ってたのかもしれないぞ？」

「あはは、その気持ちは分かるかも。だって可愛いもんね、びよぶー。あたしもスマホケース持ってるし」

そう言いながら、あおいがポケットから取り出したスマホを見せてくる。

確かにびよぶーである。

てか、マジかよ。

俺の知らないところでめっちゃ流行ってるじゃねえか、このひよこ。俺がまさかのびよぶり人気に驚く中、あおいもお弁当を広げ始める。

「そういえば、お前まだ弁当食べてなかったのか？」

「あー、うん。ちょっとバレー部の集まりがあつてね。日曜日の練習試合に出て欲しいって頼まれたんだけど、あたしその日アイス屋さんでバイトがあつてさ。ちょっと無理かもって感じで話したら、こんな時間になっちゃったんだよね。だからもうお腹ペコペコでさ、ちょうど光太郎も食べてなかったみたいだから、一緒に食べようと思って」

「なるほど。そりやお疲れさんだったな」

「えへへ、ありがと」

あおいがはにかむように笑う。

こいつとは幼少期からの付き合いということもあつてか、中学時代に続き、こうして昼食をとにもすることが多かったのだ。

ともあれ、俺もようやくお弁当の蓋を開けてみると、中にはミートボールに卵焼き、タコさんウィンナーなどなど、お弁当の定番ともいべき料理の類がふんだんに詰め込まれており、それはもう見るだけで美味いと分かるレベルであった。

「へえ、随分美味しそうに出来たね？ あとでおかず交換しよーよ」

「えっ？ あ、ああ、じゃあ一個だけな？」

「えー、別に減るもんじゃないし、一〇個くらいいいじゃーん」

「いや、普通に減るわ!? どういう計算してんだ、お前は!？」

まったく……、と俺はあおいのアホさに呆れつつ、ミートボールをばくりと頬張る。

「——っ!？」

その瞬間、口の中にソースの濃厚な味わいが広がり、思わず固まってしまった。

てか、何これ!? 超うめえ!?

料理上手だとは聞いていたけど、まさかこれほどとは思わなかった。

やべ、俺今超感動してる……。

「え、なんで泣いてるの!？」

「すまん、気にしないでくれ……。ちょっと胸に迫るものがあつてな……」

「そ、そう?」

あおいには少々不審に思われてしまったかもしれないが、さすがに弁当が美味すぎて泣いてると思えないだろう。

なので、俺は気にせず手を動かしていく。

卵焼き、タコさんウィンナー、唐揚げ——。

どれもほつぺたが落ちそうになるほど美味しく、俺は一人感動の渦に吞まれ続けていたと。

「ちよ、ちよっと光太郎!? あたしと交換する分残しといてよ〜!」

「えっ? あ、ああ、悪い悪い」

「どうやらついつい箸が進みすぎてしまったらしい。」

頬を膨らませつつ、あおいが俺の弁当箱の二段目を指差して言った。

「もう! じゃああたしはそつちをもらうからいいもん!」

「いや、全部はやんねえよ……」

ジト目を向けつつ、俺は弁当箱の二段目——つまりはご飯類が入っているであろう方をぱかりと開ける。

きつとこつちもめちやくちや美味いんだろうなと期待して開けたのだが、

「ね、ねえ、光太郎。ちよっと聞きたいんだけど……」

「……悪い。出来れば聞かないでもらえると助かる……」

そう視線を逸らす俺の意見を華麗にスルーし、あおいは弁当箱の中身を指して言った。

「それも自分でやったの……?」

「……」

もちろん頷けるはずがない。

当然だろう。

何せ、二段目に敷き詰められたご飯の上に、さくらでんぶでハートマークが描かれていたのだから。

鶏そぼろと卵そぼろで囲まれた、とても色鮮やかなハートマークである。

てか、何これー?!

男の子が好きそうなやつってこういうことじゃねえよ!?

いや、あなたが間違っちゃいないんだけど、時と場合ー?!

「ち、違うんだ!? こ、これはその……そ、そう! 自分自身へのお疲れさま的なやつなんだ!」

と。

——ぼんっ。

「えっ……」

ふいにおおいが俺の肩に手を置いてきて、思わず呆けてしまう。

すると、あおいはふっと口元を和らげてこう言ってきた。

「光太郎、さすがにそれは無理があるよ」

ですよー……。

「っていうか、どう見ても愛妻弁当じゃーん!? あたしというものがありませんがどういうことさー!? でも何これすっごい美味しー!?」

ぶんすこと怒おこってくるあおいに、俺もどう説明したものかと頭を悩なませる。

ただどさくさに紛まぎれて俺のおかずをばんばん食たっていくのは、正直やめていただきたいかった。

あとお前というものがあるとかないとかってのも、まったく意味が分からないです。

「てか、食たいすぎだろ!? 俺の弁当になってことしやがるんだ!」

「ふーんだ! あたしに隠かくれて女を作るから悪いんだよ! 光太郎の浮気者うきもの!」

——ぱくつ。

だから食たうんじゃねえよ。

「いや、浮気者うきものって……。あんな、これは……あれだ。そう、家政婦さんが作つくってくれたんだよ」

「え、家政婦さん?」

ぶしゅー、とあおいの頭から怒どきが抜ぬける。

一応周囲にはそうする予定だったし、このまま押し通してもたぶん問題はないはずだ。



「そう、家政婦さん。家事が苦手な俺のことを考えて、父さんが住み込みの人を手配してくれたんだよ」

「あ、な、なーんだ！ そうだったんだ！ えへへ、ごめんね。あたしなんか勘違いしちゃって……」

「いや、別にいいさ。ちゃんと言わなかった俺も悪いし」

「ううん、謝らなくていいよ。でもそうだよ。光太郎、ずっとコンビニのお弁当とかだったもんね。育ち盛りだし、栄養バランスとかを考えても、家庭料理の方が本当はいいだよ。きっとこのハートマークも、おばあちゃんが亡くなってしょんぼりしてるんじゃないかって、その家政婦さんが気を利かせてやってくれたんでしょ？」

「う、うん。たぶん……」

俺が迪々しく頷いていると、何故かあおいは頬を朱に染めながら、こほんっと一つ咳払いをして言った。

「まあでも、そういうことならさ、わざわざ家政婦さんの手を煩わせなくても、身近なところで手を打っておいた方がいいんじゃないかな……？ たとえばほら、目の前に超優良物件があるじゃん……？」

「超優良物件……？ ああ、料理部の高橋のことか？」

ちなみに料理部の高橋とは、あおいの後ろで本日三つ目の弁当を優雅に食している、ぼつちやり系男子である。

なんでもどっかの貴族のクォーターらしく、立ち居振る舞いが無駄に紳士っぽいのだ。

「ちよ、なんでそこで高橋くんの名前が出てくるのさ!? いや、確かに料理は上手なんだけど!? って、そうじゃなくて！ この流れならあたしに決まってるでしょ!」

何故かムキになって反論してくるあおいに、俺もいきなりどうしたのかと些か困惑する。

「いや、でもお前料理苦手じゃなかったか？」

「そ、それはまあ……そうだけ……」

気まずそうに両手の人差し指同士をつんつんさせるあおいだが、ここで引き下がるわけにはいかないとはばかりに、声を張り上げて言った。

「な、ならあたしがつておきのカップラーメン持つてくるから、光太郎はそこにお湯を入れてよ！ 三分待てば美味しく出来るからさ！」

「お前、家庭料理のくだり完全に忘れてるだろ……」

俺がジト目で突つ込みを入れると、あおいは涙目になりながら再度お弁当を食べ始めた。「うう、光太郎がイジめてくるよう……でもお弁当美味しい……」

「……はあ」

食ったり泣いたり叫んだりと忙しいやつだなと嘆息していた俺だったが、とりあえずハートマークの件はごまかせたようでも何よりだった。

また蒸し返されても面倒なので、ここは別の話題を振っておこうと思う。てか、人の弁当をほとんど食っておいでまだ食うのか、お前は。

「そういえばさ、あおいから見た桜小路先生の印象ってどんな感じだ？」

「桜小路先生の印象？　なんで急に？」

「いいからいいから。で、どんな感じだ？」

「うーん、そうだなあ。綺麗だけど怖い先生かなあ。」

腕を組み、難しい顔であおいがそう答える。

女同士ならば、もしかしたら親しさや印象も違うのではと思つてのことだったのだが、やはり俺が抱いていた印象とまるで一緒であった。

「ほら、先生って全然笑つたりしないし、なんていうか話しかけづらい感じじゃん？　だからあたしもあんまり話したことないんだよねえ。」

「なるほど。誰とでも友だちになれるお前でさえもそんな評価なのか……」

「うん？　あたしでさえも？」

「あーいや、気にしないでくれ。こっちの話だから」

「そう？　まあさすがのあたしも、あれは攻略不可能なやつ。美人だからこそ、迫力が全然違うんだよねえ。」

「ふむ……」

学校中に友だちがいるレベルの社交性を誇るあおいですらこの評価なら、先生が男女問わず近寄りたい存在になっているのは、まず間違いないだろう。

もちろん先生が、教師と生徒の線引きはしっかりしないとイケない」と言っていた以上、自分の意図通りではあるのかもしれない。

ただこの数日で分かったことなのだが、先生は根っからの鉄仮面というわけではない。

むしろ料理が上手で、見栄っ張りかつ照れ屋で可愛いもの好きな、普通の女の子なんだと俺は思う。

だからこそ――。

「なんか、もつたないいな……」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

理想の先生像とは異なるのかもしれないけれど、学校でもプライベートの時のような表情を見せれば、もつと慕われて人気先生になれるかもしれないのに。

「人間関係って難しいな」

「あはは、そうだね」

「ちなみに、保健の榛先生とかはどうだ？」

「ああ、もつびー？」

「……もつびー？」

「もつびーはいい先生だよ。いつもお菓子くれるし」

「いや、それただの餌づけじゃねえか」

「あはは、冗談だった。もつびーは気さくで話しやすいから、皆に好かれてるし、頼りにもされてると思うよ？ いつもどつしり構えてて、なんか大人の余裕があるっていうかさ」

「そう、なのか……？」

確かに話しやすいし、安心感もあるような気もするが、性格はだいたいぶ尖ってたぞ？

「うん！ ずっとなんか食べてるし、先生なのにエロい格好ばつかしてるしで、すっこく面白い先生だよ！」

「まあ、面白い先生ではあるな」

学校一近寄りたい先生と、気さくで人気のある先生——その二人が親友同士なわけか。まったく正反対のようにも思えるが、それゆえにウマが合うということなのだろうか。

よく分からんなあ……、と先生たちのことを考えながら食事をしていた俺は、最後に残しておいたタコさんウインナーをこくりと呑み込むと、「ごちそうさまでした」と先生の作ってくれたお弁当を、綺麗に完食したのだった。



翌朝。

約束通り先生の引越作業を手伝うため、俺は彼女のアパートへと赴いていた。

正直、女性の一人暮らしでアパートは危険なのではと思ったりもしていたのだが、最近のアパートはオートロックなど、防犯設備がきちんとしているらしく、建物も俺が想像しているよりずっと綺麗で新しかった。

なんだか引越すのがもったいないという気持ちになりながらも、オートロックを開けてもらった俺は、彼女の部屋があるという二階へと上がる。

すると、廊下の先に一室だけ玄関の扉が開いており、外にいくつかの段ボールが出されている光景が目に入ってきた。

どうやらすでに始めていたらしい。

「おはようございまーす」

扉の隙間からちらりと顔を覗かせつつ、俺がそう挨拶すると、奥から先生の声が返ってきた。

「おはよう。入ってくれて構わないわ」

「あ、分かりました。じゃあ、お邪魔しまーす」

一言断つてから、俺は先生のお宅へと上がる。

何気に女性の家へと上がるのは、あおい以外ではじめてである。

しかもあおいは違つて一人暮らしときた。

なんか微妙にいい匂いもするし、一体この先にどんな桃源郷が待っているのか。

俺は胸をドキドキさせながら、一歩ずつ廊下を進んでいく。

「おお……」

そうして到着した先生のお部屋は、ワンルームタイプのシンプルな造りで、真っ白な壁紙と白木調のフローリングが、いい感じに清潔感を醸し出していた。

家具も白木をベースとした明るいものが多く、カーテンもレースの透像タイプで、外からは見えづらいものの、光はふんだんに取り入れているという感じのものだった。

窓の側にはきちんとお手入れのされた観葉植物も置かれており、実におしゃれなお部屋

である。

ゴミ屋敷になりかけているうちとは大違いだ。

これが先生の……いや、大人の女性のお部屋……っ！

とりあえず胸いっばいにこの空間の大気を取り込んでおこうとした俺だったが、

「——っ!？」

そこで見てしまった。

部屋の端に置かれていたシングルベッド——その中央辺りに、丸々太ったひよこのぬいぐるみが、どーんと存在感たっぷりに鎮座しているということ。

そう、ぴよぷーである。

やはり先生はこのおでぶなひよこが好きらしい。

というか、よくよく室内を見渡してみれば、そこかしこにある小物類も、結構可愛らしいものばかりだし、やはり可愛いもの好きなのだろう。

「よく来てくれたわね。助かるわ」

「いえ、それより昨日のお弁当は本当に——」

とお礼を言おうとしたところで、俺は言葉を失ってしまった。

だがそれも当然であろう。

「あら、どうしたのかしら?」

そう不思議そうに小首を傾げる先生の、その恰好がまさかの、だるだるTシャツだったからだ。

伸びきってしまったのか、あきらかにサイズが合っておらず、桃色のブラ紐ごと肩が半分丸出しになっている上、おっぱいもこぼれそうになっているという、目のやり場に困る仕様だったのである。

その上、下も妙に短いショートパンツで、色白の太もがむっちりしているとというダメ押し具合だ。

てか、あまりに短すぎて下着で出てきたのかと思っただわ!?

「ちょ、なんつー恰好してるんですか!？」

当然、俺は先生を注意する。

が、先生は俺が何を言っているのか、まったく理解出来ない様子だった。

「はあ? 私の恰好がなんだと言うの? ただの部屋着じゃない」

「いやいやいやいや! ただの部屋着はそんなにエロくないですって!？」

「え、エロっ!? ——はっ!？」

そこでようやく先生も気づいたらしい。

彼女は両手で胸元を覆い、俺を鋭く睨みつけてきた。

「あ、あなた、一体どういうつもり!? よりにもよって教師の胸を覗くなんて……っ」

「いや、なんで俺が悪いみたいな感じになってるのかは知りませんが、先生が着てたんじゃないですか!？」

「と、当然でしょ!?! だってこれが一番着心地がよくてリラククス出来るんだもの! 自分の家の中くらい好きなものを着たっていいじゃない! 文句があるならあなたが目を潰しなさいな!」

「え、どういう理屈!？」

しかも目を、逸らせぐとかじゃなくて、潰せぐなの!?

何この教師超怖い!?! と俺が内心すこぶる動揺していると、先生は小さく嘆息しながら「……まあいいわ」と警戒を解いた。

「とにかく、私はこの、だるティーグを脱ぐ気はないから」

そんな紅茶の名前みたいに言われても……。

「なので、あなたも気にしないようにしなさい。というわけで、早速作業を始めるわよ」「いや、まあ先生がそれでいいんじゃないですけど……」

てか、切り替え早いな……。

部屋の隅にリュックを置いた後、何から手をつけるべきかと佇んでいた俺に、先生はポニーテールを揺らしながら、「じゃあ、まずはこれを……っ」と何やら重そうな壺らしきものを持ち上げ始めたのだが、

「うう、重い……っ」

思ったよりずつと重かつたらしく、ふらふらと覚束ない足どりになる。

「ちよっ!? お、俺が持ちますから置いてください!」

慌てて先生のところへと向かおうとした俺だったが、

——どんっ!

「うおっ!」

足もとに段ボールがあつたことに気づかず、これを蹴り倒してしまう。

「……ふう」

そうこうしているうちに、先生は壺を床に置いてしまったので、とりあえず俺は倒してしまつた段ボールを起こし、その中身を片づけようとしたのだが、

「うん? なんだこれ? って、げえっ!」

そこに散乱していたのは、色取り取りの下着類であつた。

しかも。

「こ、これはまさか……っ!」

偶然にも俺が手に取つてしまつたのは、妙に布地の薄いシヨーツだつたようで、お尻の部分でTバックになつていた。

え、先生こんなの穿くの……?

と。

「——ぎゃあああああああああああああああああああああつっ!」

「うおおっ!」

先生がもの凄い速さで俺の手からシヨーツを奪い取る。

そして鬼気迫る表情でこう念押ししてきた。

「あ、あなたは何も見なかつた!? いいわね!? 何も見なかつたの!」

「は、はい……」

俺が嘔然としながら頷いていると、先生は真っ赤な顔で持つていたシヨーツと、散らばつた下着類をまとめて段ボールの中にもち込んだ後、それをガムテープでぐるぐる巻きにして、ダッシュで玄関の外へと持つていった。

——数秒後。

「お待ちせ。それでなんの話だったかしら？」

「いや、今さら冷静を装われても……」

何ごともなかったかのように戻ってきた先生に、俺はジト目を向ける。

しかし彼女の中ではすでになかったことになっているらしく、「なんのことかしら？」と素知らぬ顔をしていた。

なので、俺もこれ以上突っ込むのは野暮だと思い、壺を指差して言った。

「いえ、その壺は何かなと」

「何って、ぬか床に決まってるでしょう？」

ぬか床!?

「え、ぬか床ってあのお漬物を漬ける的な？」

「ええ、そうよ。私、ぬか漬は自分で漬ける派なの」

「へえ、若いのに凄いですね。まるでばあちゃんみたいです」

「だ、誰がおばあさんみたいですか?！」

「へっ? あ、いや、そうじゃなくて!?! うちの祖母も昔漬けてたんで、懐かしいなあと……」

「あ、そういうこと……」

「そ、そうですね。こんな若くて美人な先生に、そんなことを言うわけないじゃないですか」

ぶっちゃけおばあちゃんみたいな趣味だとは思っているが、懐かしいのは本当だ。

「そう。ならせいぜい夕食を楽しみにしておきなさい。とっておきのやつを出してあげるから。ふふ、あなたのおばあさまのぬか漬けと私のぬか漬け——どちらが美味しいか勝負よ」

そう嬉しそうに笑う先生に、俺も「はい、楽しみにしています」と表情を和らげる。いつもはぱりっとスーツを着こなしているのに、家ではだるティーを着て無防備。

しかも可愛いものが好きで、ぬか漬けも漬けられるくらい料理が得意。

学校では絶対見せないような先生の色んな一面が見られて、なんとというか、俺は単純に嬉しかった。

たぶん仲良くなれた気がしたんだと思う。

だからもつと先生のことを知りたいなという気持ちになりながら、俺は先生秘伝の壺を、

慎重に部屋の外へと運んでいったのだった。

「てか、本当に重いなこれ!？」

「……ふう。だいぶ片づきましたね」

Tバック事件など、多少のアクシデントはありつつも、俺たちは作業を続け、お昼を迎えた現在、部屋の中の荷物もかなり箱詰めすることが出来ていた。

元々そこまで荷物が多かったわけではないので、このペースなら夕方くらいまでには全部の荷物を外へと運ぶことが出来るだろう。

あとは業者さんが取りにきて、俺の家まで荷物を運んでもらう寸法になっている。

なお、冷蔵庫や洗濯機などの大型品に関しては、そのままリサイクル業者に持ってってもらうらしい。

まあうちに持ってきても場所をとるだけだしな。

ならばとこの際処分することにしたというわけだ。

「そうね。そろそろお昼だし、一度休憩にしましょうか」

「はい、分かりました」

頷き、俺はぐいっと背筋を伸ばす。

すると、先生が冷蔵庫の中からコンビニのお弁当を二つ取り出し、それらをレンジで温めながら言った。

「お弁当はハンバーグと唐揚げのどちらがいいかしら？」

「あ、じゃあハンバーグでお願いします。わざわざすみません」

「いいえ、気にしないでいいわ。それより謝るのはこっちの方よ。本当はちゃんとしたものを作ってあげたかったのだけれど、調理器具をほとんどしまっちゃったから、したくても出来ないの」

「いえ、お昼を用意してもらえただけでも十分です」

「そう。じゃあ先にそこで手を洗っておきなさい。その間にテーブルの上を片づけておくから」

「あ、すみません。じゃあお言葉に甘えて……」

先生に言われたとおり、俺がキッチンに向かおうとすると、

「それにしても暑いわね」

——たゆんつたゆんつ。

「——っ!？」

ふいに先生がだるティーの襟元をばたばたと引つ張り始め、釣られて胸元が弾けるように揺れた。

「……ふう」

その上、件のだるティーも汗で薄らと透けており、桃色のブラジャーが浮き上がっているという目の毒具合である。

当然、そんな無防備な姿が目の前に晒されてしまったては、さすがの俺も心中穏やかではなく、(で、で、で)「ええ!? しかもブラが透けてるし!? てか、今さらだけどうなじが超エロい!?!」と一人無駄に鼓動を高鳴らせていた。

が、先生はまったく気にする素振りを見せず、もしかして俺のことを男だと意識していないのでは? とそれはそれでショックを受ける俺なのであった。

そうして半日ほどかけ、先生宅での作業を終えた俺たちは、業者さんにあとのことを任せ、タクシーで白瀬家へと到着したのだが、

「これは酷いわね……」

「は……」



というように、家の有り様を目の当たりにした先生が、割と素でどん引きしていた。なお、さすがにだるティーのまま業者さんの相手は出来なかつたらしく、今は上にパーカーを羽織っている。

「一応先生も来るので、昨日はさすがに掃除をしようと試みたのですが、これだけ汚いところから手をつけたらいいか分からず……」

「……ふう。まあいいわ。とりあえずこのままでは荷物を運べないし、まずは廊下とリビングを中心に、一階部分を片づけましょうか」

「分かりました。たぶん今日中に二階までは難しいと思いますので、今夜はリビング横にある祖母の部屋を使ってください」

「ええ、分かったわ。じゃあまずはこの廊下中に散乱しているゴミ袋を、一箇所にまとめて道を作りましょう。もうすぐ荷物も届くしね」

「分かりました」

頷き、俺は玄関からリビングにかけて乱雑に放置されていたゴミ袋を、一旦リビングの方へと全て運ぶ。

同時に先生は家中の窓を開け、室内の空気を入れ替えつつ、埋もれていた掃除機を使い、廊下の埃を吸い取る。

ついでにざっとだが雑巾がけも行い、とりあえず玄関周りと廊下の掃除を終わらせると、タイムリングよく業者が到着した。

なので、一旦業者から荷物を預かり、それらを廊下へと積んだ俺たちは、そのまま先生の寢床を確保するため、リビング横の和室——つまりはばあちゃんの部屋の片づけを行うことにする。

うちの間取りは一階にリビングや和室があり、二階に俺や父さんの部屋などがあるといった感じだ。

先生の部屋に関しては、二階の倉庫代わりになっている空き部屋を提供しようと思っ

ている。

「多少埃つぽくはあるけど、この部屋は意外と片づいているのね」

「ええ、一応祖母の部屋なので、ゴミとかを置くのはどうなのかなって」

「なるほど。そういう心がけは感心よ。ところで、本当に片づけてしまっても構わないのかしら？」

控えめに尋ねてくる先生に、俺は首肯して言う。

「はい。いつまでもこのままにしておくわけにもいきませんからね。それに、大事なものはきちんと分けて保管しておこうと思いますので」

「分かったわ」

そう領くと、先生は「これから遺品の整理をさせていただきますね」とばあちゃんに對して両手を合わせてくれた。

その行為がなんだか無性に嬉しくて、俺は先生にお礼を言う。

「あの、ありがとうございます。きつと祖母も喜んでいるはずです」

「いえ、気にしないでちようだい。ここでお世話になる身なのだから、むしろ当然のことよ。じゃあ始めましょうか」

「はい！」

大きく領き、まずは小物類からだど勢い込んだ——瞬間。

——カサカサカサカサッ。

「……」

俺たちの目の前を、一匹の黒い生命体がちーつすとはかりに横切つていった。

言わずもがな、G的なやつである。

だがまあうちにはよく現れるので、今さら驚きはしない。

むしろ廊下の掃除中に出てこなかったのが不思議なくらいだ。

なので、全ての掃除が終わったあとにでも、ホイホイ的なシートを置いておこうと思つたのだが、

「——きゃあああああああああああああああああああああああああつっ!？」

「うおわっ!？」

突如先生が大絶叫を上げ、俺に飛びかかつてきたではないか。

というか、俺の頭をその特盛りおっぱいに抱え込み、押し倒してきたのだ。

当然、何ごとかと困惑する俺だが、目の前は真つ暗だわいい匂いがするわめちやくちや柔らかいわでもう大変である。

「ちよ、せ、先生!? は、早く離れてください!？」

「む、むむ無理に決まってるでしょ!? こ、腰が抜けたわ!? は、早くなんとかしてちようだい!？」

「そ、そんな無茶な!？」

——カサカサカサカサッ。

「ひいつ?! い、いいから早くあれをなんとかして!! わ、私あれだけはダメなの!!」

——むぎゅーっ。

「ちょ、ちよっと?! そ、そんなに抱きつかれたら?!」

そりゃ男の子ですもの。

元気にもなりませんわなあ……。

「それでもちろん、それは先生も気づいたらしい。

「ちょ、ちよっとあなた?! こ、こんな時に何を考えているの!? 信じられない!? 不潔

よ、不潔!」

「い、いや、だって仕方ないじゃないですか!? この状況でなんの反応もしない方がおか

しいですよ!」

「わ、分かったから早く静めてくれるかしら?! そ、そんなものをいつまでも私にあてな

いでちよっさい!」

「だ、だったら早く離れてくださいよ!」

——ぐいつ。

「ひゃうんっ?! ちょ、どこを触っているの!」

「す、すみません!」

「先生が真っ赤な顔で怒声を上げる。

なるべく変なところを触らずに引き剥がそうとしたのだが、どうやら腰は弱かったらしい。い。

とはいえ、女性の身体でほかに掴める場所など俺には思いつかず、一向に事態が進展しないまま時間だけが過ぎていく。

一体どうすればよいのかと俺も参っていたのだが、その時、やつがカサカサとリビング方面に向けて走り始めたではないか。

「い、今よ、白瀬くん! 早く襦を閉めて!」

「は、はい!」

先生に言われるがまま、俺は最後の力を振り絞って襦を閉め、やつをリビングへと追いやる。

「……はあ」

その瞬間、俺たちは揃って脱力し、とりあえずなんとかなったと俺も一息吐いていたのだが、

「まったく酷い目に遭ったわ……。でもこれで一安心ね……。ふう……」

「~~~~っ!」

先生が俺の胸元で汗ばんだ感じの熱い吐息を漏らしており、押しつけられた胸諸々の感触と相まって、なんかもうとにかくエロいことこの上なかつた。

ぜ、全然一安心じゃないんですけど!?

Gもリビングに出て行っただけだし、身体の一部はカチコチだし、安堵する先生の横で、まったく休まっていない俺なのであつた。

そんなこんなで、なんとか先生の部屋を確保することが出来た俺たちは、まだ段階ボーラがほとんど開梱出来てはいなかったものの、今日の作業はここまででにすることにした。

夜の帳が下りてきたというのもさることながら、お互い朝早くから引越し作業で動き回っていたので、単純にへとへとだったのである。

というわけで、俺たちは夕食や就寝の準備をするべく、各々行動していた。

キッチン周りはまだちゃんと掃除をしていないのだが、元々そんなに使っていなかったので、さっと雑巾がけした後、先生が家から持ってきた調理器具や、食器類を使えば大丈夫だろうということになった。

相談の結果、まだこの近辺の地理がよく分かっていない先生の代わりに、俺が買い出し

へと行くことになり、その間、先生が風呂掃除をするようになったので、

「えっと、まずは豚の細切れ肉と」

スーパ―に着いた俺は、先生に渡されたメモを見ながら、食材を次々にかごへと入れていった。

「しかし初日から色んなことがあつたな……」

最中、俺は日中見た先生の意外な一面の数々を思い浮かべていた。

正直、先生のようなタイプは、清楚なワンピースに袖を通し、家でクラシックでも聴きながら、優雅に紅茶を嗜んだりしているのではないかと思っていた。

が、それがどうだ。

清楚なワンピースどころか、部屋着はだるだるのTシャツとショートパンツな上、紅茶ではなくぬか漬けに自信を持っているというおばあちゃん具合である。

しかもあの厳しくて、俗世のものになど一切興味がないのではという先生が、まさかの特大びよぶりぬいぐるみをベッドに置き、ゴキブリを見ただけで悲鳴を上げ、腰を抜かしてしまつたりするのだ。

本当に人は見かけによらないとかなんとというか……。

いや、見かけは見かけで、今日は色々危うい場面も目撃してしまつたのだが……。

それにしても、と俺の脳裏のうりに、先生の艶あでやかな姿が思い起こされる。言わずもがな、とにかくおっぱいが凄まじかった。

何が凄まじいって、やたらと跳ねまくるのである。

ことあるごとにぼんぼん跳ねるものだから、目のやり場に困るといえるか、見てくれと言わんばかりにでかいというか……。

その上、適度に汗ばんだ感じがエロいんだ、これが。とくにうなじがやばい。

もしかして俺はうなじフェチだったのでは……？ と自分の隠かくれた性癖せいへきに気づくくらい、やばい色香いろかを放ちまくっているのである。

もつとも、元々先生は超ちやうがつくほどの美女なので、脱げばおのずとエロくなるのは、至し極ごく当然たうぜんのことなのだ。

ただそんな先生でも、今までに誰だれともお付き合いをしたことがないという。

教師になるために一生懸命いっしょうけんめいだったというのが、その主な理由らしいのだが、それにしつて普通ふつうはあんな美女を放はなつてはおかないと思う。

やっぱりガードが堅かたすぎるのが原因なんだろうな。

まあ、本人が別段彼氏が欲ほしいわけではないのなら、余計なお世話でしかないんだけど。

でも俺だけが先生のそういう可愛かわいいところを知っているというのは、もつたいたいというか、むしろほかの人には知られたくないというかなんというか……。

なんとも複雑な心境の俺なのであった。

「ただいま帰りましたー」

そんなことを考えつつ、頼たのまれた食材と、ドラッグストアでホイホイ的なものを大量に買って戻もどってきた俺は、帰宅の報告をするため、先生がいるであろう洗面所へと赴おもむく。

が。

——がちやつ。

「先生ー？ 頼たのまれたものなんですけど、これで合ってますかね？ なんか種類がいくつ
かあって……」

「……えっ？」

先生が驚いたような顔をする。

当然たうぜんだろう。

「でも綺麗だったな……」

下着姿の先生を思い出し、俺はそう独りごちる。ぶりんっ、と弾力のありそうなお尻に引き縮まったお腹、すらりと伸びた手脚、そして何よりあの特盛りなおっぱい。あとうなじも。

まるで人形のように均整の取れた先生の身体は、それこそ一つの芸術品のような感じで、とにかくめちゃうくちやエロくてやばかった。

「てか、よくよく考えてみれば、俺は今そんな先生の入った残り湯の中にいるのでは……っ!?!」

ふとその真実に気づき、俺は愕然と両手でお湯を掬う。

ここに先生の成分が溶け込んでいると思つたら、なんとも言えない興奮を覚えてきた。くそっ、俺は変態になつてしまつたのか!?

よくネットの動画サイトなどでは、女の子のお風呂シーンで、皆ごくごくしているのだが、さすがにそれを現実でやったらアウトである。

というか、ここには入浴剤のほかに、俺の成分も溶け込んでるし……。

「く、これが同棲……っ」

風呂の残り湯だけでこんなにも動揺してしまうのだ。

女の人と一緒に暮らすのって、想像していたよりずっと大変なことなのかもしれない。

「ぐぬぬ……っ」

くそっ!

俺がこんな変態になつてしまつたのも、全ては先生がえっちいからだ!

「……うん? えっちい身体?」

その瞬間、ぼわぼわと俺の脳裏に再び先生の下着姿が思い起こされる。

しかも今度は台詞つきだ。

『——もうダメでしょう? そんな悪い子には、先生がお仕置きしてあ・げ・る♪』

「NOオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!」

すでに頭が沸いていたのだろう。

一人で大絶叫した後、俺はしばらくの間、「あばばばばばばばばばっ!」と湯船の中で悶絶していたのだった。

渦巻く煩惱との激しい戦いを終えた俺が、満身創痍でリビングへと戻ると、そこではエプロン姿の先生が、調理をしている最中だった。

「あら、上がったのね。随分騒がしかったようだけれど、少しお湯が熱かったかしら？」
 「あ、いえ、久しぶりのお風呂だったので、ちょっとテンションが上がってしまいました……」

「そう。ならいいわ。もうすぐ夕食の準備が終わるから、座って待っていてちょうだい」

「はい、分かりました」

頷き、俺は料理の並べられたテーブルへと着く。

本日のメニューは野菜炒めと卵焼き、お味噌汁、そして先生こだわりのぬか漬けだ。

ご飯はさすがに炊くのが間に合わなかったもので、レトルトのやつではあるが、きちんとお茶碗に盛りつけられている。

なんとも家庭的で温もりのあるメニューだ。

「さて、じゃあ食べましょうか」

「はい」

先生がエプロンを外し、俺の向かい側へと座る。
 が。

「おふっ!？」

その瞬間、先生のおっぱいがぼよんっと弾んだ。

相変わらずとんでもないおっぱいである。

キャミソールがはち切れそうになっているではないか。

だがまあだるティーが洗濯中なので、それも仕方あるまい。

「いただきます」

揃って手を合わせ、俺たちは夕食に手をつけ始める。

まずはお味噌汁を少しずついただいた俺だったが、

「おお、美味しい！」

口に含んだ瞬間、味わい深いお味噌の風味が舌に広がり、堪らず感嘆の声を上げてしまった。

いや、マジで今まで飲んだお味噌汁の中でも、トップクラスに輝くほど美味しいのではなからうか。

「お口に合ってよかったわ。自家製のお味噌を使ってみたのだけれど」
 「え、これ自家製なんですか!？」

店売りも真っ青の美味さなのだが……。

「ええ。去年作って半年ほど寝かせておいたの。よく出来ているでしょう?」

「はい! 凄く美味しいです!」

「さすがと再度これを堪能しつつ、俺は同じく自家製のきゅうり漬けや、大根漬けもいただく。

え、何これめっちゃうめえ!」

ちようどいい塩分と、こりこりの食感が実に食欲をそそる。

というか、ご飯が止まん!」

「これもめちゃくちゃ美味しいですね! まさかお漬物をこんなにも美味いと思う日が来ようとは……」

「ふふ、それは大げさよ。でも気に入ってもらえて嬉しいわ。ぬか漬け勝負は私の勝ちかしら?」

「そ、それは……お、同じくらい美味しいんじゃないかなと……」

どこか歯切れの悪い様子の俺に、先生はふふっとおかしそうに笑って言った。

正直な話、ばあちゃんのお漬物が大好きだった俺としては、どちらが上かなんて決められなかったのである。

「そうね。あなたがそう言うのなら、きつとそうなのでしょう。ここでも漬けさせてもら

うつもりだから、食べたければいつでも言っただい」

「はい!」

大きく頷き、俺は野菜炒めや卵焼きにも舌鼓を打つ。

こういう家庭的な料理を食べたのが久しぶりということもあるだろうが、お世辞抜きで先生の料理は、お弁当同様めちゃくちゃ美味かった。

おかずが美味いからなのか、レトルトのご飯まで炊きたてに思えてくるくらいだ。

なんか、幸せだなあ……。

ばあちゃんが生きていた頃を思い出し、俺の胸が温かい気持ちに包まれる。俺があまりにも美味そうに食べるのが気になったのだから。

「……そんなに美味しいの?」

と、先生が控えめに尋ねてきた。

「ええ、もちろんです! 先生、絶対いいお嫁さんになりますよ!」

「なっ!? そ、それはセクハラよ、白瀬くん!」

「ええっ!? そ、そうなんですか!」

恥ずかしそうにしている様子の先生に、俺はがーんつとショックを受ける。すると、先生はこほんつと一つ咳払いを言った。

「でもその気持ちだけはありがたく受け取っておくわ。なら期待を裏切らないようにしないといけないわね」

「い、いえ、別にそんな気負わずとも……。というか、先生って意外と家庭的ですよね」「べ、別にこのくらい普通でしょ？ というより、私は元々家庭的な女ですっ」

ふいっと赤い顔でそっぽを向く先生に、俺は「確かに」と頷く。

「キャリアアウーマンっぽい人って、忙しいからか、大体家事が出来なかったりする印象なんですけど、先生は家事全般が得意でもんね。お味噌やぬか漬けも自分で作るくらいですし」

「ええ、そうよ。だから相手さえいれば、私はいつでも結婚出来るのだけれど、今は仕事を優先したいの」

そう言って、先生は赤い顔のまま、ご飯にどほどほどお醤油をかけ始めた。

冷静を装ってはいるが、内心かなり動揺しているらしい。

たぶん割とドジっ子なんだろうなあ……。とそんなことを思った俺だった。

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！

©Aki Kusanagi, Mappaninatta 2019